
No. 4

なお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

No.4

【Nコード】

N9866F

【作者名】

なお

【あらすじ】

『遊落龍へようこそ』

そう書かれた看板の向こうには、爛々と輝くネオンの灯り。表向きは、世界最大の歓楽街、だが、そこは一度足を踏み入れれば最後、二度と抜け出せない鳥籠のような街だった。今日も誰かが死んでいくそんな街で、一軒の古びた殺し屋喫茶を営む青年がいた。このお話は、そんな店主を中心に、交錯する人々の人間模様を描いたお話である。

第1話『親の理由、子の理由』（前書き）

どうも、新連載に手を出してしまった、バカな作者です（笑）

この『No.4』は、『間宮くんと災難日記』は、似ても似つかない作品になってます。

ダークシリアス全開で突っ走って行くんでよろしくお願いします！

第1話『親の理由、子の理由』

陽は沈み、外にはうつすらと満月の光が降り注ぐ。これから外の世界の住人は眠りにつこうと、足早に家路へと急ぐのをよそ目に、その一角には、爛々と、ネオンの明かりが灯り始め、まるで朝が訪れたように輝いていた。

『遊落寵へようこそ』

そう書かれた看板の先に、この風景に似ても似つかない歓楽街があった。

一度は皆思うだろう。こんな寂れた場所の外れに歓楽街が、と。普通、歓楽街というモノは、その場所の一番の中心街に作る。それなのに、なぜ、このあまり人目のつかない、賑わうには程遠い場所にあるのだろうか。その事を尋ねると、返ってくる答えはみな同じだった。そして、その答えに、また、十中八九の人が口を揃え、『なるほど』と納得する。なぜなら、そこは、ただの歓楽街…とは言い難い街だったからだ。

薬物・人身売買・違法賭博など朝めし前で、その他にも、いろいろな、ならず者達で溢れている。それはこの街に入らなければ知り得ぬ事で、表の華やかさしか知らぬ外の世界の者が、その美しく妖しい明かりを目当てに、光に群がる蛾のごとくに引き寄せられ、そのまま足を運べば最後、遊べるだけ遊ばされ、奈落の底に落とされて、気付けば籠の中の鳥だから、ここは『遊落籠』と呼ばれるのだ。

と、遊落籠の説明はここまでにして、本題に入ろう。今、ある一人の青年が、とあるビルの中で、今か今かと身を潜めていた。『なぜ？』って？それは…

「おい、これで本当に金は返さなくていいんだな!!」

「ああゝ？それは、物を見てから決める。」

「な、約束が違うじゃないか！？俺は、娘を売れば、借金を払わなくていいと聞いたから連れてきたのに!!」

「うるせえよ？でけえ声出すんじゃない？こつちも、ちゃんと分かってるよ、お客さん。けどね、現物がちゃんとして、売り物としての役割を果たしてるか確認しないと、って言ってるんだよ？分かる？」

こんな会話は、日常茶飯事に繰り返されていて、それを耳にする度に、慣れとは恐ろしいかと、青年は一人自嘲していた。

「で、物はどこよ？」

「ここだっ…トランクの中だー!!」

（娘をトランクって…）

ガチャー

堅気…では絶対にない男が、トランクを開けて中身を確認する。

「どうだ？美しいだろ？それなら高くうれ

…おい」

元々低い声の男の声色が、さらに低くなった。

「どういう事だ？てめえ…」

「ど、どうした？」

「中身がねえぞ！！物はどこ行った！！」

男は声を荒げて、もう一人の男に問いただした。

「な、何を…そんな訳…！！いない！！リカがない！！」

「てめえ…俺を騙そうとしやがったのか！？」

「違う！！そんな事はしない！！…ちゃんと、薬で眠らせてトランクに積んだ筈なのに…」

「じゃあ、どこへ行っただ！？ああ？そんな事言っで、ホントは、娘が可愛くなつて隠したんじゃないのか！？」

「し、知らない！！私が、隠すはずないだろ！！」

「もういい、あんたとは、交渉決裂。悪いけど、この話はなかった事にしてくれ。それと、朝9時までには、五千万用意しとけよ？出来なきゃ、てめえ殺して中身売り飛ばすからな。」

男は、もう一人の男にそう忠告をし、続けざまに、てめえの外を売ったところで大した額にもならないしな、と、吐き捨てた。

「そんな！？待ってくれ！！無茶だ！！急に、五千万なんて！！払えない！！」

「知らねえよ、んなこたあ。てめえが借りたもんだろう？返すのが道理つてもんだ…それに、俺は、恥かかされといて、待ってやるよ。うな優しい男じゃないんでね。…じゃあな、お客さん、また後で…」

そう言つと、金色の髪で細い目をした男は去つていった。

「クソ！！あの黒龍紋の狐め！！どうやったら、五千万なんて大金用意出来ると言っんだ！！…それにしても、一体リカの奴何処に！？」

『…教えてあげましょうか？』

「だ…誰だ!？」

『娘さん、何でトランクの中にいなかったんでしょうね。ちゃんとロープに巻き付けて詰め込んだ筈なのに?』

「どうして!?!…まさか、貴様が娘をどこかに!?!出てこい!?!どこにいる!?!姿を見せろ!?!」

『いいですよ?ただし…!』

「えっ!?!」

それは、一瞬だった。例えるならそう、一筋の光。その光が闇を

切り開き、身を隠していた声の主が姿を表すと同時に、男の体は真つ二つに切り裂かれた。

「ぎゃああああ!!」

あたり一面に血飛沫が飛び散り、男の聞くに耐え難い断末魔の叫びが響いた。

「あんまり時間がなさそうなので、大事な事だけ説明します。」

そんな男を見ても顔色一つ変えずに、青年は淡々と話しを続ける。

「はじめまして、お宅のお嬢さんに雇われた者です。たった今、アナタを殺しました。」

「……っ……」

「アナタのお嬢さんだけど、アナタが、黒龍紋の狐からの電話を取りに行っている間にトランクの中から助けましたから。」

「!?!」

「駄目ですよ…目を離しちゃ。ちゃんと、計画を立ててたんでしょ？1ヶ月も前から自分の娘を売り飛ばす計画をね。それなのに…一瞬の事で全部台無しになっちゃったね。ま、あの電話も俺なんですよけどね。『もしもし…？部屋に盗聴器がついてるかもしれないからお客さん確認してよ？』ってね。俺、モノマネ得意でね、似てるでしょ？」

「……………」

そう笑いながら、先ほどの金色の髪をした男のモノマネを披露する青年だったが、斬り伏せられた男は、霞んでいく視界と朦朧とする意識の中にいて、もう何も聞こえてはいなかった。

「あ、そろそろ逝っちゃおう？…時間だしね。まあ、行き先は地獄だろうけど、元気だね…って、それはおかしいか？じゃあ、成仏してね？って無理か。」

嘲笑うかのように、最後の言葉を男にかけて、琴切れて動かなくなった男の首に手をかざし、死を確認した青年は、何事もなかったかのようにその場を後にした。

所代わって、ここは、遊落籠の中にある一風変わった喫茶店。どこが変わっているかと言うと、まず、第一に昼間は絶対に開かない事。その次に、夜に開いていたとしても、それは奇跡に近いくらいの割合だと言う事。そして、最後に、この喫茶店の店主の顔を殆

どの者が知らないと言う事。そんな、バカげた話があるものか、と思われるかもしれないが、事実だから仕方ない。

しかし、今日はラッキーデーだったらしく、喫茶店のドアには、openの文字がかけられていた。だが、外から見える店の様子は、明かりが一つもなく、物静かだった。

そんな、喫茶店で一人誰かを待っている女がいた。そう、彼女こそが、先程殺された男が指していた、娘の『リカ』だった。もう、お気付きの方はいるかも知れないが、あの淡々とした冷酷な殺し屋こそが、この店の店主で、彼女は、彼の報告を待っていた。

カーラー

鐘の音が一つ鳴り、誰も開けようとしないドアが開いた。どうやら先ほど殺しを終えた店主が帰宅したらしい。本来ならば、もう少し早くに着いていたであろうが、予定時刻より少し遅れた理由を、店主は、こう伝えた。

「遅くなりました。いやあ、この先で殺人事件があつて野次馬で一杯で……つつい、僕も一緒に見てしまいました。ほんと、怖い世の中になりましたね」

一刻程、自分も、見ず知らずの者を殺したと言つのに、その事など、初めから無かったかのように、そう言った。

「そんな事より、父は！？父は死んだんですか！？」

そんな事、か、…誰かが殺されたと言うのに、この女にとってはそんな言葉で済んでしまう程の些細なもののかと、店主は心の中で思った。

「ええ、死にましたよ。運がよければ、明日には誰かが死体を見つけてくれるんじゃないですか？」

そう、運がよければ。

悪ければ、一生誰にも見つけてもらえない。ずっと、その場所から永久にとどまり続けなければならないのだ。この街は、そんな街だった。どこかで、誰かが、野垂れ死にしようが、誰も気にしない…いや、気にする事を知らないのだ。誰かが誰かを殺したって、この女のよに『そんな事』で片付けてしまうような人間ばかりだった。

何て非道な！！と誰かが昔嘆いていた事があった。だが、しばらくして、その人間も同じ様に、『そんな事』で、片付けてしまう者になり果てていた。

この街で暮らすには、それが必要で当たり前。普通の人間の感覚では、とてもやっていけないのが、遊落寵だった。

「…そう、明日までは見つからないのね…良かったわ。これで、借金返せる。」

父親の死をそう吐き捨てた女もまた、この遊落籠に落とされた一人だった。

「ありがと、マスター。今からあの男の中身売って、借金を返してくるわ。残りのお礼は、お金が出来次第に持ってくるから。」

父親が、借金を苦に自分の娘を売ろうとしたのと同じで、娘もまた、どうしようもなくなった金策の為に、父親の殺しを依頼してきたのだった。

「じゃあね、マスター。また、」

女は、軽やかな足取りで、店を後にした。多分、いや、確実にこれで彼女とは最後だろうと、その背を見ながら店主は見送った。あの父親の中身なんて、たかがしれている。彼女は知らないのだ、今時、臓器売買で儲かるのは、外の世界だけ。この街では、毎日のように、生きた人間、死んだ人間が売り買いされている。言い方は悪

いかも知れないが、有り余っているのだ。

これだから外の世界の人間は…、そう思っても忠告してやることはないし親切に教えてやることもない。第一に、誰がどうなろうと興味がないし、余計な事を言っただけで済まないと、あの男が黙っちゃいないだろう。先ほど、店主が殺した父親が言っていた、黒龍紋の狐と呼ばれる男。

この街で、『No.9』の称号を与えられている、あの男、自分がの上がる為なら、罵られようと、蔑まれようと、汚い事を平気でやってのける。そんな男を相手にするのは手に余る。まだまだ長生きしたいからな…と、誰に言うわけでもなく、店主は呟いた。

もう少ししたら、全てを知ったあの女が、ヒステリックに取り乱す様子が目に浮かぶと、笑いながら店主は、ドアのopenをcloseにかけ代えた。

第一話

『親の理由、子の理由』終わり

第1話『親の理由、子の理由』（後書き）

ありがとうございます。如何でしたか？初のダークは！？

何とか読めたと言っただけなら幸いです。

これから、間宮くんと平行に更新したいなとは思っているんで、此方もよろしく願います。

それでは

第2話『1カラットのダイヤモンド』（前書き）

おはようございます。
連日の小説更新です。

それでは、スタート

第2話『1カラットのダイヤモンド』

その日は、酷く気分が悪かった。それは、久しぶりに行ったスロツトで、大枚をはたいて負けたからでも、昔の恋人と偶然鉢合わせだからでもなく、まあ…少しは、それらも入っているとは思うが、それよりも何よりも、今にも降り出しそうな、この曇天の空のせいだった。

（降ってくる前に急がないと…ホントに今日はついてないな。）

そんな事を思いながら駆け足で帰る店主の前に、この街ではもの珍しい光景が目に入ってきた。

（警察…？何でここに？）

警察がいるのがそんなに珍しいのか？とお思いだが、大変珍しい事なのだ。この遊落龍は、法律国家の手の届く範囲を超えてしまっているからだ。前にも話したが、毎日のように誰かが売られ、死んでいくのがこの街。麻薬や武器の密輸、違法賭博と、様々な犯罪が繰り返されるが、その顧客の中には、国家の要人や御上などが多数存在し、それを黙殺しているからである。だから、この遊落龍には警察の手がまわる事はない。

では、なぜ警察がいるのか？答えは簡単だった。

『外の世界の誰か』だ。

外の世界の誰かが、運悪くこの街に流れて来てしまったのだろう。そして、何も知らないままに殺されてしまったのだ。

店主は、そつと目を閉じ、ただ手を合わせた。

「すみません…この人を知ってるんですか？」

店主が手を合わせていると、この仏の知り合いとなのか？と、警察官に声をかけられた。

「いいえ、知りません。」

「そつ…ですか…」

そう答えると、警察官は、瞬時に落胆の表情を見せた。

「何があつたんですか？」

店主は聞いた。

「殺人ですよ。首を絞められた窒息死です。可哀想に…」

そう答える警察官の顔は明らかに違っていた。めんどくさい、帰りたい、一刻も早くこの街から出たい、そう考えているのだろう。続けて警察官はこう付け加えた。

「お腹に赤ちゃんがいたんですよ。何ヶ月かは知らないけど。」

「そつですか…で、その赤ん坊は？」

店主が問うと、警察官は静かに首を横に振った。

「…何があったか知らないけど、ここまでしなくていいのにね…人間のする事じゃないよ、こんな事…」

警察官は、辛辣な面もちでそう吐き捨てた。

人間のする事じゃない…か、この街でそんな事を言っただんなら、きつと皆鼻で笑うだろう。店主は、この警察官はこの街に住むには、到底不向きだなと嘲笑った。そんな考えでは、せいぜい三日で死ぬだろう。まあ、この警察官がこの街に、住むことはないだろうが…。

「早く見つかるといいですね。その人を殺した犯人。」

「そうだね…」

まず有り得ないだろうが、と思いながらその場を後にした。

本格的に雨が降り出したのは、店主が店に着く五分前の事だった。

「クソ…今日はホントについてない!!」

土砂降りの道を、手で雨をよけながら、己の不運さを呪うように呟いた。

あと少し…その角を曲がれば、もう我が家だ、店主は急いで曲

がった。…だが、曲がらなければ良かったとすぐに後悔した。

「遅いわよ？何してたの？」

そこにいたのは、先ほどお会いした昔の恋人と、年が、18・9の、まだあどけなさがどこに残る、少年だった。

「何してる？」

店主は、眉間に皺をよせ聞いた。

「見て分かんない？あなたの帰りを待ってたの。それよりも、早く中に入れて頂戴。あたしもこの子も濡れちゃうわ。あなたみたいに、」

店主は、チラッと少年を見た。少年がいきなり見られて驚いたの

か、目を逸らした。

「お前、趣味変わったんだな。」

店主は、それだけ言うたさつさと自分だけ店の中に入り鍵を閉めた。

「はあ？ちよつと、開けなさいよ！！冗談じゃないわ！！この寒空の雨の中、ずっと待ってたのに！！」

「誰も待つてくれとは言っていない、帰れ。」

「それが、昔の恋人にかける言葉！？」

「知るか、俺はお前とはもう無関係だ。早くその新しい男と、どこか暖かい所へ行くんだな。」

店主は、やってられないとばかりに奥へ入ろうとした、その時、

「お願いです！！姉を殺した男を殺して下さい！！」

外から叫び声が聞こえた。

「どういう事だ？」

店主は聞いた。

「どういう事って…そういう事よ。この子は依頼人。」

「そうじゃない、なぜ依頼人とお前が一緒にいる？」

店主は奇々しながら、再度聞いた。

「なぜって、あたしがここを紹介したからよ。彼がこの街で殺し屋を捜してると言うから。」

「……………」

「嘘じゃないわよ？てゆうか、中に入れて頂戴よ！！ホントにびしょ濡れになっちゃう！！」

溜め息を一つつき、店主は彼と彼女を店の中に入れた。

「今日は、休みだぞ？面の札を見なかったのか？」

「見たわよ？けど、入れてくれたって事は、依頼を受けてくれるって事でしょ？」

「違う、外に警察がいたからだ。正面で殺した何だと騒がれたくないからな。」

「それは、気付かなかったわ。ごめんなさい。…でも、この依頼受けてあげて？お願い！！」

「話を聞いてからだ。」

店主は、少年に向き直った。

「詳しく話してくれますか？」

少年は、今度は目を逸らさず、しっかりと見据えながら話始めた。

「あれは、半月程前でした。姉の加代が、少しばかり恋人に逢いに
出てくると言ったきり、戻ってこなかったんです。不審に思った俺
は、最初にその恋人に電話しました。そしたら、今は自分の家にい
る、何日かしたら帰ると言われ、その日は電話を切りました。でも、
何日たっても姉は帰ってこなくて、直接迎えに行こうとその恋人の
マンションに向かったんです。」

「少しばかり過保護なんじゃ？」

店主は、少年に言った。

「親を早くに亡くして、姉弟二人で生きてきましたから……」

少年は、苦笑いで答えた。

「そうですか……すみません、続けて下さい。」

「はい、それで、そのマンションに行ったのですが、もう既に引き
払った後でした。それで、再度電話をして問いただしたら、アイツ
……すいません、あの男は、笑いながら姉を殺して捨てたと言いま
した。まるで、ゴミを捨てるみたいに……そして、続けてこういま
した。自分は遊落籠の中の人間だから、その事を警察に話しても、捕
まらないと、」

「なるほど…確かにその彼が言う通りですね。捕まることはまず無い。」

「途方に暮れた俺は、ある噂を耳にしました。遊落龍には、依頼すれば誰でも殺してくれる殺し屋がいると…でも、場所が分からず…」

そう言うと、少年は隣をチラリと見た。

「そこで、あたしの出番。紹介屋のあたしを訪ねてきたのよ。」

「なるほど…で、お姉さんの遺体は？」

「いいえ、まだ見つかっていません…今もどこかでひとりぼっちに…いや、親子で、俺が見つけるのを待ってると思います。」

「親子？お姉さんには、お子さんが？」

「お腹の中に…来月が予定日でした。」

「どうしたの？」

「さっき、その裏手の道で仏さんを見た。…若い妊婦だった。」

「それって!？」

「姉です!…どこです!…教えて下さい!…その場所!…」

「落ち着いて下さい。まだ、そうと決まった訳じゃない。」

興奮した少年に座るよう促した。

「姉です！！姉に決まっています！！若い妊婦なんて姉以外考えられない！！」

「お客さん、ここは遊落寵です。毎日誰かが死んでいく。若い妊婦も例外じゃない。娼婦が子を身ごもれば、切り捨てられ殺されるってのはざらです。」

店主は、淡々と少年に話した。それを聞いた少年は信じられないと目を見開いたまま固まっていた。

「可笑しいでしょう？けどね、それがこの街なんです。」

そのやり取りを聞きながら、隣で彼女が悲しい顔をした。

「…分かりました。その依頼受けましょう。」

「本当ですか！？」

「ええ、但し約束を2つ程守って貰います。」

「はい、守ります！！」

「では、一つ目。この事を他人に一切口外せず、墓場まで持って行く事。」

「はい!!」

「そして、2つ目…殺人実行の日までは、この店に出入りしない事。守れますか？」

「守れます!!」

「なら、次に依頼料の話ですが…」

「分かってます、家にあったもの売れるだけ売って、少ないかもしれませんが…有り金は全部持って来ました。」

そう言つと少年は、手に抱えていたボストンバックを差し出した。

「失礼…」

店主は、彼からそれを受け取り、中身を確認した。ざつと見積もつて四百…いや五百はあるだろうと、しわくちゃになった紙幣を見つめながら店主は思った。

「足りませんか？足りないなら、家も売ります!!」

「十分です。」

心配そうに声をかけてきた少年に店主はそう答えた。ふと、少年の手元に目を合わせたら、先ほどからずっと、何かを握りしめてい

る拳が見えた。

「何を持ってらっしゃるんですか？」

店主は、指を差しながら聞いた。

「ああ…これですか、これは姉の形見です。」

少年がそう言いながら、開いた掌の上には、1カラットのダイヤモンドの指輪が乗せられていた。

「形見と言っても、アイツの贈り物の一つなんです…」

悔しそくに、少年は声を震わせながら呟いた。それを見た店主は、暫く考えてから、こう切り出した。

「依頼料、そのダイヤモンドに変更していいですか？」

「え？」

「このお金はいりません、代わりに、そのダイヤモンドを頂きます。」

「で、でもこんな安物じゃとても依頼料なんて!？」

「かまいません、それを下さい。」

そう言つと、店主は、先ほどのポストンバックを少年に返した。

「じ、じゃあ…これを」

少年は、不思議な顔でボストンバックと引き換えに指輪を渡した。

「ならば、依頼成立ですね。今回の依頼は紹介屋が間に入っている
ので、事の説明は、僕が直接あなたにはしません、彼女に聞いて下
さい。殺人実行日も彼女に伝えますから。」

「分かりました。本当にありがとうございます!!」

少年は、何度も頭を下げお礼を述べた。

「それでは、殺人実行日まで。…あ、そうだ、先ほどの妊婦の仏で
すが、あなたのお姉さんで間違いないでしょう。…すいません、最
初から分かっていました。話が途中だったもので、柊、」

「何？」

「彼を案内してやれ、まだ今なら警察と一緒にいるだろうから。」

「…分かったわ、急ぎましょう!!」

柊と呼ばれた女は、店主の思惑を察知したのだろう、少年にそう
言つと早々に店を後にした。その背を、慌てて追いかける少年が、

店主の方に振り返った。

「…えっと、」

「マスターで。僕の事はそう呼んで下さい。」

「…はい、マスター。それじゃあ、また後日。」

少年は、店主に深々と一礼して駆けて行っただ。

彼女が急いだ訳は、ここへ流れついた、外の人間の仏は、大概が引き取りてに引き渡されないままに、闇市に処分されてしまう。それが、この街の暗黙の了解。それを知ってか知らずか、警察は死体屋と呼ばれる者らに引き渡すのだから、国家警察なんてあったものじゃない。しかし、今日は生憎この雨だ。現場検証は長引いているはず、だとすればまだ間に合う。

店主は、未だに降り止む事を知らない、雨音を聞きながら、握りしめた依頼料の指輪を、そっとポケットに忍ばせた。

第2話

『1カラットのダイヤモンド』

終わり

第2話『1カラットのダイヤモンド』（後書き）

ありがとうございます。

いやあ〜ハードボイルドは難しい。

ハードボイルドになってるかどうか分かりませんが（汗

でも書いてて楽しいので、頑張って書きます

それでは、また

第3話『ルールと等価交換』（前書き）

どうも、早くも3話目ですね、
この調子で、いつも更新出来たらいいな（笑）

それでは、3話目スタート

第3話『ルールと等価交換』

男は酷く怯えていた。その理由は、二日前に男宛に差出人不明の郵便物が届いたからだ。

不審には思ったが、とりあえず中を見ようと封を開けたら、中から一枚の写真と紙切れ、そして、1カラットの指輪が入っていた。

その指輪は、『確かあの女に渡した指輪』：男の脳裏に過ぎった、『あの女』とは、彼が自ら手をかけ殺した、恋人の加代の事だった。しかし、この指輪は、『あの死体と一緒に処分したはず』なぜ、ここに？』男は困惑しながらも、一緒に同封されていた、写真と紙切れを手にとった。

「これは!？」

写真に写っていた風景は、あの日、男が加代を殺した場所だった。

そして、紙切れに一言、こう記されていた。

『あなたを、二日後、迎えに行きます、加代』

それは、死んだはずの恋人からのメッセージだった。

「旦那、いらっしゃい。久しぶりだね」

店主にそう声をかけたのは、この店で、身の回りの世話係を任されている、『ソウ』と呼ばれる男だった。

「ああ、水仙はいるか？」

「生憎、水仙様は、今外出中だよ。」

「…そうか、」

その声に男が、声を潜め、こう言った。

「急ぎの依頼かい？」

「まあ、な」

「そうかい、なら急いで伝達してやるよ。」

「悪いな……」

「いいさ、旦那はうちの得意様だからね。」

そう言つと、男は、『少し待っておくれ』と、店の奥に消えて行った。

店主は、それを横目で見ながら、ここは相変わらず殺風景だ、と、当たりを見回していた。

この店は、遊落寵随一の情報屋、水仙が営む店で、No.2の称号を与えられている彼女の店に、訪れる者は後をたたない。それだけ、信用の置ける店だからだ。

しかし、誰しもが情報を与えてくれる訳ではない。水仙の氣に入る者なら出来る限りの情報は与えてくれるが、氣に入らない者は、門前払いをくらう……と、なると、自分は氣に入られている中にいるんだなど、店主は思った。

「伝達したから、すぐに戻るだろうよ。」

五分ぐらい経っただろうか、奥の部屋から男が戻ってきた。

「ありがとう、すまないな」

「いいえ、俺はこれぐらいしか役に立てないからさ。それよりも、旦那、もう行くのかい？」

「ああ、『顔も見せずに帰ってすまない』と、水仙に伝えといてくれ。」

店主は、そう言いながら、これを、と、黒い封筒を男に渡した。

「…了解です。」

「じゃあ、また来る」

「旦那、」

踵を返して、外へ出ようとした店主を男が呼び止めた。

「何だ？」

「…お気をつけて」

男の声色が低くなる。そして、店主にそっと目配せした。『つけ

られてますよ』と。

店主は、『この男は、水仙によく教育されているな』と、感心しながら、知っていると言わんばかりに手だけを上げて、店から出て行った。

その店主の様子を、男は、『流石です。』と、笑みを浮かべながら見送った。

あの日、水仙の店を訪れてから、店主の周りを、常にうろつく者がいた。もちろん今日もだ。しかし、それを気にする訳でもなく、店主は身支度をする。なぜなら、今日は、殺人実行日だからだ。依頼人の少年には、予め紹介屋の柊を通じて伝えてある。もうすぐやってくるだろう…と、時計を見ながら相棒の刀を取った。

この刀は、名前こそ無名だが、そんじやそこらの刀とは、比べものにならないくらいのおしさを纏っていた。

以前、武器屋のゲンに、この相棒を見せた事があったが、彼は、これを一目見るなり『いくらだ？』と、店主に詰め寄ってきた事を思い出した。

『悪いが…』と、断ったが、それでも引かず『いくらでも出す』と、頻りに言っていた。…それくらい彼の心を引きつけ放さなかったのか、この相棒は。…まあ、自分もその一人なんだがな、と、刀を見つめ苦笑いした。

カラン

やがて、客人がやって来た事を知らせるドアの音が一つ、鳴った。
どうやら、依頼人が来たみたいだ。

「すみません…いますか？」

「早く出てきなさいよ！」

ついでに、オマケも。

「うるさい、聞こえてる。」

店主は、なぜお前と一緒に来るんだ？と言わんばかりの態度で、
彼女にそう言った。

「何その態度？あたしがいるのが、そんなに不満？」

彼女は、『ホントに昔から変わらないわね、そういうところ』と、
嫌みたっぷりに、そう言った。

「お久しぶりです。お客さん。」

店主は、彼女の嫌みを、さして気にする様子もなく無視して、依頼人に話かけた。依頼人の少年は、無視された彼女の方を一度見てから、『どうも』と、店主に挨拶した。

「俺、この日を待ち遠しく思っていました。ついに、あの男を殺るんですね！姉さんを俺から奪おうとして、のうのうと暮らしている…あの男は絶対に許せない！！お願いします！！あの男に最大の恐怖を与えてから殺して下さい！！」

興奮気味に喋る少年に、隣にいた彼女は、目を丸くした。あきらかに依頼を頼みに来た時とは様子が違ったからだ。

そんな彼女をしり目に、店主は無表情で、少年にこう言った。

「お客さん、お言葉を返すようで悪いですが、殺り方はこちらが決めます。口出しは遠慮願います。」

店主のその答えに、少年は、一瞬、眉を潜めたが、すぐに何事もなかったような顔で、『すみません』と、一言、わびた。

「それじゃあ、行ってきます。お客さんは、ここでお待ち下さい。」

「え！？俺も一緒に行けるんじゃないんですか！？」

「いいえ、お客さんはこの場で待つて頂きます。それが、ルールですから。」

「…一目だけでもダメですか！？あの男が…地獄に堕ちて朽ち果てるのを、この目に焼き付けておきたいんです！！」

『お願いします』と、少年は店主に頭を下げた。その様子を見かねた彼女が、連れて行つてはどうかと間に割つて入ってきた。

「実の姉を殺されたのよ？それ程、この子の恨みは大きいのよ…だから、いいじゃない。今回だけ、特別に…」

「駄目だ。例外は認めない。」

「でも…！」

「部外者は、黙っている。今は、俺の仕事だ。紹介屋の仕事は、もう終わつてる筈なのに、ノコノコと…帰れ、仕事の邪魔だ！」

店主は、そう彼女に一喝した。

「…そうね、悪かったわね！！あなたの仕事の邪魔ばかりして！！邪魔者はさっさと退散するわ！！」

ボタン！！

そう言い残して、彼女は乱暴にドアを閉め去って行った。

「あ、」

「気にしないでいい…ただの女のヒステリーだから。それよりも、お客さん…」

店主の依頼人を見る目が変わった。そこだけ、刺々しい空気を帯びているみたいに。そして、こう続けた。

「何か、一緒に行かなければいけない事がお有りで？」

「え!？」

「…いやね、やけに一緒に着いて行きたがってるから、何かまずい事でもあるのかと思って。」

「そ、そんな事は何も…!! そうですねっ、素人が一緒に行ったりしたら、お仕事の邪魔になりますもんね…! すいません、そんな事考えもしないで我が儘言つて…大丈夫です。ここで待ってます!!」

急に動作が慌ただしくなった少年を見て、店主は、『分かって頂き、ありがとうございます』と感謝を意を伝えた。先ほどの痛いくらいの空気はどこへやらで、店主の表情はすっかり元に戻っていた。

「…それじゃあ、お客さんいつてきます。」

「はい、お願いします。」

ドアに手をかけ出て行こうとする店主の動きが止まった。そして、振り向き少年に向かってこう言った。

「あ、それと…念には念をで、もう一度、もし、ルールを破って後をつけてきたりしたら、お客さんにもそれなりの代価を支払って頂きますので…あしからず。」

「代価…？」

「ええ…そうですね、等価交換とでも言うておきましょうか。」

「……………」

少年が眉間に皺を寄せる。

「あ、そんな難しい顔をなさらないで下さい。大丈夫、あなたがちゃんとルールを守ればいいだけの事ですから。…ちゃんと、ね。僕は嘘が嫌いな性分ですから。だって、よく言うじゃないですか、嘘は最大の裏切りって。…それじゃあ時間も時間なんで、さっさと済

ませています。それでは……」

そう言い残して、店主の背中は闇に消えて行った。そして、店主が消えた景色を、意味ありげな表情で、いつまでも見つめている少年がいた。

第3話

『ルールと等価交換』
終わり

第3話『ルールと等価交換』（後書き）

いつも、読んで頂きありがとうございます

へボいですけど、読んで下さる方がいてくれるからこそ、続きを書こうという気になるのです

ですから、これからもよろしくお願いします

第4話『secret No.4』（前書き）

どうも、

作者です……いつも、読んで頂きありがとうございます。

今回は、少しばかり長いですが、どうぞ読んでやって下さい

それでは、スタート

第4話『secret No.4』

もうすっかり陽もくれて、空には、これから起こるであろう事を
予期するかのように、赤い満月が、その妖しく美しい輝きで、辺り
を照らしていた。

『コツコツ…』

こちらに向かつて聞こえてくる足音は、決して軽やかなものでは
なく、例えるならそう…死刑囚が、自らの裁きを受けるために登っ
ていく、長く重い、死への階段までの道のりのようであった。

「き、来たぞ！！いい加減に姿を見せろ！！こんな所に呼び出して、
一体何の用だ！！」

声を震わせながら、男は怒鳴った。なぜなら男が呼び出された場所、自らが愛する者を、自らの手にかけて殺した、場所だったからである。

『いやゝすいません。わざわざ…こんな所まで、足を運んで下さって、』

どことなく緊張感が漂う場面に、気の抜けた、陽気で憎たらしい声が聞こえた。

「だ、誰だ!!」

『誰? ああゝそうか、はじめましてですね。…僕は、今からあなたを殺す者です。』

そう言いながら現れたのは、全身、闇を纏った一人の青年だった。

「殺す……？」

「はい。ある人に依頼されて。」

男は呆氣にとられた。今、自分と対峙している青年に、見た目からして、まだそんなに年端もいつていないだろう、優しそうで、どこか気品を感じるこの青年、とても人殺しをしているなんてみえない、そんな青年に、『今から自分は殺されるのか？』……そう思うと、男はおかしかった。

「あれ？何かおかしいですか？」

そんな男の心の内を、知ってたか知らずか、青年はそう男に尋ねた。

「いや…悪い。お前が、あまりにも面白い事を言うから、つい」

男は、青年に向かってこう続けた。

「あの指輪も、写真も紙切れも…俺の恋人になりすまして、送ってきたのは、お前か？」

「はい、そうですよ。だから、ちゃんと宣言通りに2日後の今日、あなたを殺しに来ました。」

『そうか…』と、笑っていた男の笑い声が、ピタリと止まった。そして、

「…どうして俺が殺したと知っている？」

と、青年に、殺意にも似た敵意を向け、そう切り出した。

しかし、それに怯む様子は、全くといってない青年が、男に向かつて、こう答えた。

「ですから、ある人に依頼されてって言ったじゃないですか、さっき。もう…一度で理解して下さいよ。僕…」

「!!--」

「何度も同じ事を繰り返すのは嫌ですよ？」

青年は、『気をつけて下さいよ』と、相変わらず気の抜けた声で喋ってはいるが、先ほどとは違い、その眼はもう笑っていないかった。そんな青年を目の当たりにして、男は、恐怖で足がすくんだ。

そして、この時、初めて男は、ああ、自分はこの青年に殺されるのだと悟った。

「さてと、じゃあさつさと済ませますか…最後に何かおっしゃりたい事は？ありましたら、聞きますけど？」

青年は、刀を鞘から抜き、男に向けながら、ないなら…と、一歩

また一步と近寄った。

「待ってくれ…最後に一つ…」

「何です？」

男は観念したのか、はたまた最初から覚悟を決めていたのか、大した抵抗もする事なく、青年に、こう言った。

「…最後に一つだけ教えてくれ…アンタに俺の殺しを依頼した奴は…」

「ええ…あなたの恋人の弟です。」

「そうか…」

「…もう、時間ですね…それでは、いずれ地獄でお会いしましょう。」

「…ああ、待ってる。」

男は、最後に笑った。青年は、そんな男に微笑み返して、刀を振りしした。

「これで、邪魔者は全て消えた……」

「何がです？……お客さん。」

「……!!」

依頼人の少年は、二人のやり取りを闇からこっそり覗いていた。

「な、なぜ……、うし……」

「うし？……ああ、なぜ後ろに、と、おっしゃりたいんですか？」

少年は、困惑していた。たった今、目の前で殺人を犯した店主が、ちよっと目を離れた隙に自分の後ろに立っていたからだ。

「あれ？…お客さん、もしかして、僕について来ちゃったんですか？」

店主は少年に尋ねた。

「い、あ…ちが…」

「…って、ついてこれる訳ないか…だって、店を出る時は完璧に気配を消したし。」

「そ、そうですね…素人の自分がついてこれる訳ないじゃないですか…！」

少年は、必死で店主に訴えた。そんな少年を見て店主は、

「そうですね…すみません。じゃあ、何でここへ？」

「あ、あの男を殺してくれると思ったら、いてもたってもいれずに、姉さんのところへ…」

少年は、しどろもどろに答えた。

「そうですか…そうですね、分かります。お姉さんに早く報告したい気持ち…」

店主は、その整った顔で美しく少年に微笑んだ。少年は、そんな店主の様子を見てほつと心を撫で下ろした。しかし、それも束の間、店主は『でも…』と、少年にこう切り出した。

「どうして、この場所がお姉さんの殺された場所だと？」

「…えっ？」

「だって、この場所…仏が見つかった場所と全然違いますよ？…おかしいですね。報告するなら仏が見つかった、あの裏通りに行くんじゃないんですか？あそこで殺されたと考えるのが普通でしょう？」

そう…ここは、店主の言うとおり、佳代の死体が見つかった裏通りとは、遠くかけ離れた場所だった。

「もしかして、お客さんは、『最初からこの場所でお姉さんは殺された』って事をご存じだったんでは？」

「知らない！！俺は…ただ…そうだ！！あの警察…警察に聞きました！姉は、この場所で殺されたと…」

そう言い訳する少年に対して、今度は妖しげな笑みを浮かべて、店主はこう言った。

「お客さん…嘘はいけません。」

「な、」

「ここは遊落龍ですよ？」

「どういつ…」

「この街では、毎日のように人が死にます。それは自らが命を絶つか、殺されるか、二つに一つです。そんな街で仏さんが一人…失礼、正しくは二人、見つかったところで、その理由をわざわざ突き止める奴もいなければ、ましてや、『どこで、いつ、殺された』…なんてめんどくさい事を、調べてまで書かなければいけない必要なんてないんですよ。そこに死体があった。それだけでいいんです。」

「…？」

少年は怪訝な顔で店主を見た。

「僕の言っている意味分かりませんか？…つまり、この街では死体が見つかった場所＝殺人現場なんです。…ですから、警察がこの場所をわざわざ調べて、あなたに教える事はないんですよ。」

「そんなのおかしいじゃないか！！」

「ええ…おかしいですよ。お客さんの住んでる世界なら有り得ない話だ。…けどね、この街はそういう街なんです。普通の常識や、国家警察が通用するような街じゃないんですよ。お客さんが、たかが2・3回足を運んだだけでは、理解し難い街なんです。」

「どうして…！！」

店主は、『2・3回では少なかったですかね』と、少年に言った。少年は、この店主は全て知っていたのだと気付いた。

「いつからだ…」

「何です？」

「あんた、いつから知ってた？俺が何度かこの街に来た事あるって。」

「最初から気づいていました。」

「最初から？」

「ええ…まあ、でも確信を持ったのは、あの日、水仙の店へ向かった僕を、後ろから、あなたがつけて来られた時ですけど。」

少年は、その事もバレていたのかと、思いながら店主の話を聞いた。

「初めて来たはずのあなたが、紹介屋の場所を知っていた事も疑問に思いましたし、お姉さんが家を出てから、あなたが電話で彼と話をした内容も腑に落ちなかったですから。」

「フツ…完璧に演じたはずだったのにな…どこで狂ったんだ、俺は？」

少年は、今までの怯えた態度を翻し、威嚇するように店主を睨みつけ、そう聞いた。

「あなたは、最初に彼はこう自分に言ったと言いました。『今は、自分の家にいる。何日かしたら帰る。』と、」

「それが？」

「そこですよ。そこで納得するような性格じゃない筈だ。あなたは

」

「別に、姉の恋人を信頼しただけだ。そのどこが

「あなた、お姉さんが付き合う男性と何度も揉めてますね…お姉さんに相応しくない、早く別れろと。あの彼にも、同じ事をおっしゃったんじゃないですか？それに、『極度のシスコンで、外泊さえ許さない困った弟』と、お姉さんの付き合っていた元彼さんが話してくれました。」

「そんな事、いつの間に…そうか！あの時！！」

「ええ…僕が水仙の店で、調べてもらっていたのは、彼ではなくあなただったんですよ。…お客さん。」

「クソッ…」

「気づくはずですよね…あなたは、てっきり彼を調べていると

思っていたんだから。…そんな訳ないでしょう？彼は自分で遊落龍の人間だと、あなたに公言している。その情報だけで、彼の調べはつくと確信しました。これでも一応殺し屋ですからね。…けど、どうしても僕の力だけでは調べられない事があった。それは、外の世界に住むあなたの事だ。残念ながらある理由でこの街から僕は出れません。だから、外の世界の情報は一切入手出来ない。そこで、情報屋の水仙に頼む事にしたんです。」

「『少しでも疑問を感じたら徹底的に調べる』、それが僕の師の教えですから。この商売は、客との信頼関係で成り立ちます…少しの嘘でも足元を掬われる事があるので。…けど、あなたはその信頼関係を自ら壊し、ルールを破った。二度もね…」

「はっ、ルールなんて破るためにあるんだよ！そもそも人殺しのあんたがルールは守れて…矛盾してるぜ！！」

少年は、店主に向かってそう吐き捨てた。

「確かに、私は人殺しです。…けど、お客さん、それはあなたも同じでしょう？」

「何…？」

「だって、あなたがお姉さんを殺したんですから。」

「…何を、殺したのはあそこで死んでいるあの男…」

少年は、やってられないとばかりに両手をあげた。

「ええ…そうですね。最初は。」

「最初…？」

「はい、彼は確かにこの場所で彼女を殺した…はずだった。首を絞めて殺したんですが、やはり恋人ですね…どこかで躊躇したんでしょう。彼女は死んでいなかった。でも、彼は死んだと思っていたのでその場を後にした。…そこに、あなたが来た。いや、最初から『いた』と、言った方がいいでしょうか？今日みたいに、ずっと二人のやり取りを見ていたんですね。彼が去った後、あなたはお姉さんに駆け寄った。そして、お姉さんにまだ息がある事に気付いた。」

「フン！何を…そんなのあなたの想像だ！！」

「まあ、いいから最後まで聞いて下さい。反論は後で聞きますから。…あなたは、お姉さんを殺すつもりはなかった。ただ、あなたがこの世で一番殺したかったのは、あそこで死んでいる彼ではなく、二

人の愛を受けて授かった、お姉さんのお腹の中の赤ん坊だったんですから。」

「……………」

「あなたはチャンスとばかりにお腹の中の赤ちゃんを殺そうとした……しかし、お姉さんは、それを必死で守ろうとした。それが、あなたを殺意へと駆り立てた。違いますか？」

「フツ……アハハハ！！まさか、ここまでとは……流石だよ。そうさ、全部あんたの言うとおりだ！！俺は、姉さんを殺した。あの男が殺しそこねた姉さんをな。理由もあつてるよ。……姉さんが、あんな男の子を必死で守るから……俺以外をその瞳に映すから……殺してやったのさ。俺はずっと姉さんを愛してたのに、姉さんはそれを裏切ったんだ！！」

少年は、当然の行為だと、店主に訴えた。

「すみませんが、あなたの行為には賛同しかねます。」

店主は少年にそう吐き捨てた。

「フッ…まあいい…最初から誰かに分かってもらおうなんて思っ
ちやいないさ…」

そう言つと、少年は闇に向かつて『出てこい!!』と、叫んだ。
すると、少年の合図と共に、多数の店主と同じ闇を纏った者が現れ
た。

「はぁ…二重契約ですか…」

少年は、わざとらしいため息を吐いた。それが少年の癪に障つた
らしく、声を荒げて男達に店主を殺すよう指示をした。しかし、一
向に行動を起こさない男達に、更に少年は声を荒げた。

「何やってる!!早く殺せ!!こっちは金を払ってるんだぞ!!」

「…無駄ですよ。」

そう、笑いながら店主は男に言った。

「何…どういう意味だ!?!」

「やれやれ」お客さんはホントにこの街の事を何にも分かっていない人だ。そんなお客さんに、親切な僕から、この街の事を一つ教えてあげましょう。…『secret No.』って聞いた事は？」

「『secret No.』？」

「はい、聞いた事はないみたいです。ま、当然か…」

もったいぶる口調で喋る店主に少年はそれ何かと尋ねた。

「ま、平たく言えば、その道のexpertと言ったところでしょうか。例えば、お客さんが知っている、紹介屋の柊、彼女はsecret No.5の称号を与えられています。僕が、行った情報屋の水仙…彼女はNo.2ですね。『secret No.』を与えられた者は、その道の上に立つ事が出来ます。つまり、その道の者は、『secret No.』には逆らえないと言う事です。」

分かりましたかと、店主は優しい声で少年に聞いた。だが、少年は何も答えず、ただ顔だけが真っ青になっていた。

「な、ならあんたは…」

「はい。secret No.4の称号を与えられています。以後、お見知りおきを…とはいきませんけどね。」

「は…あ…なに…」

「あなたは、ここで死んでもらいます。ルールを破った代価としてね。」

「ま、待つて…」

「待てませんよ…」

そう言つと、素早く店主は刀を抜き、少年の右手と両足を切り落とした。

「あゝあー!!」

「あ…すいません。手元が狂いました。一回で仕留めるつもりだったのに…」

大丈夫ですか、と、聞く割には、さほど悪びれる様子はなく、まるでそれを楽しんでいるかのよう、血溜まりに伏せ、激痛に、もがき苦しむ少年を見た。

「あゝあーっ！！」

「痛いですか？痛いですよね…その痛みは、お姉さんとお腹の中の赤ん坊の痛みです。だから、止めは刺しません。それをあなたは体に焼き付けて逝って下さい。それでは…」

「まっ…ころ…し…」

店主は、闇に纏う男達に、少年は、捨て置けと命令した。『もう一人は？』と聞かれたので、しばらく考えて、『死体屋に引き渡せ』と、答えた。それが、きつと彼に対する最良の選択だろうと考えたからだった。後は任せると男達に告げ、店主は店へと戻った。

店の前に戻ると、誰もいない筈の部屋から人の気配を感じた。しかし、その気配は見知った気配だったので、店主は警戒する事なくドアを開けた。

「何の用だ？」

「開口一番にそれ？まあ、いいわ。お帰りなさい。」

ドアを開けると、いつもとは違つ、どこか落ち込んだ雰囲気の柊が店主の帰りを待っていた。

「…何を落ち込んでいるかは知らないが、慰めて欲しいなら他を当たれ。」

そんな彼女を見て店主は冷たくあしらつた。

「別に慰めて欲しいわけじゃないわよ。…あなたに謝りたくて、」

「謝る？なぜだ？」

「だって、あの依頼人あたしが紹介したから…こんな厄介事に…」

「別に、厄介事でも何でもなし。それに、あの日、お前に再会した時から、こんな結果になる事はだいたい想像がついてた。昔からお前は厄介な事を持ち込む奴だったからな。」

「そうね…ねえ、」

「何だ？」

「一つ聞いていい？」

「…ああ」

「なぜ、ターゲットは、彼女を殺したの？ やっぱり邪魔だったから？」

「…さあな。ただ、これはあくまで推測だが、あの男は、彼女を思ってた殺したのかもな。多分、彼女は薄々気づいていたのさ。男が遊落龍の人間だとね…」

店主は続けた。それを柊は黙って聞いた。

「気付いてもなお、愛そうとした。男もそんな彼女の気持ちを楽しんでいた。出来る事ならと願った、だがそれは叶わなかった。アイツがそれを許さなかった。人一倍外の人間を…純粹無垢な人間を嫌うアイツがな。だから、男は彼女を殺した。アイツに殺される前に彼女を、とね。まあ、それは単なるエゴでしかないんだろうが…」

「そう…そうね、この街の人間が幸せになれる訳ないものね…幸せになれる時、それは死んだ時よ…」

彼女は伏せ目がちにそう呟いた。彼女の言うとおり、あの男も最後に笑いながら死んだのは、きっと、もう、これで『遊落龍と言う名の呪縛から解放たれる』といったからであろう。

「でも、彼女は幸せだったでしょうね、最後まで愛されて死んだんだから…それが、例え間違った愛だったとしても。」

そう、きっと『愛』は確かにあったのだ。彼にも、少年にも、彼女にも。変わらず『愛』はあった。なのに、いつの間にか、『欲』が生まれた。その『欲』こそが、今回の事件に発展したんだと、店主は、星のない空を見ながら、そう思った。

第4回

『s e c r e t N o . 4 』 終わり

第5話『不健康な男』

残り少ない煙草に火をつけた。

最近、本数が多くなったと思う。健康の為に、やめなければならぬと思うが、そうまでして生きたいとは思わないので、やめずにこころまできた。まあ、職業柄、匂いを残す事は御法度だし、何より煙草を吸い続けていると、すぐに息があがってしまう。ダメな事ばかりだな…と苦笑しながら店主は、目を閉じた。

昔は匂いすら嫌いだったのに…いつからだろうか？麻薬のように、手放せなくなったのは…

きっかけは、あの人吸っていたから。それだけだった。それだけで、嫌いだった煙草を吸い続けている。それであの人との繋がりを確認するかのよう。

『おい、煙草がない。買ってきてくれ。』

『吸いすぎですよ…師匠。やめたらどうですか?』

『馬鹿か?俺から煙草を取ったら何が残る?御託はいいから早く買
ってこい。』

口が悪くて、喧嘩っ早く、良いところと言えば、顔と殺しの腕だけ。女にだらしがなく、男に特に、自分には敵しい人だった。けど、その敵しさの中に、師なりの愛情があっただと思う。

そんな師と出会ったのはいつかの雨の日だった。ある理由から、この街に流れついた俺が、生きる事と決別しようとしていた、まさにその時、浮気をしたしてないで、思いっきり横っ面をひっぱたかれ文句をたれる彼と出会ったのは。…今、思ってもアレは本当に間抜けな顔をしていたと思う。あの師の顔を見て思わず、自分は今から死ぬ、という事を忘れて、彼に大丈夫かと尋ねた事を覚えている。

『ああ、！？大丈夫なわけねえだろ？クソッ、思いっきり殴りやがって…』

『あんたが、浮気したからだろ？』

『クソガキが知った口聞くな。っーか、向こうは浮気っていうけど、俺はただちよつといいなって思っただけだ！断じて浮気などしてねえ。』

『いや、それ立派な浮気なんじゃ…』

『ああ、もうめんどくせえ…別れるか。俺縛られるの嫌いだし？』

『知らないし…勝手にしたら？何か心配して損した。』

そんなやり取りをしている最中、師は徐に煙草を取り出し、自分に吸うか、と差し出してきた。

『いらない。煙草嫌いだから。』

『これだからガキは…こんな美味しい物を嫌いだとは…ま、お前なんかじゃ、コイツの味は一生分かんねーか。』

『分かりたくもないね。つーか、ガキガキってさっきから五月蠅いけど、俺もう18だから。』

『充分、ガキじゃねーかよ。』

『…うるせえ…オッサン』

『殺すぞクソガキ!!俺は、まだお兄さんの領域だボケッ!!』

あの人は、本当に昔から変わらない。

「俺様」と云う言葉は師の為に在るものだと思う。これから死ぬという人間に、ダラダラと愚痴を零した思うと、今度は好みのタイプを語りだしたり、まとまりのない話を延々と語る人だった。それはまるで、自分が師の前で死ぬのは、許されないかのように思えた。彼は、最初から知っていたんだろう。自分が生きる事を止めたのを彼は、最初から気づいていたんだろう。生きたいと心のどこかで思っていた自分に。

あの雨の日の出逢いがあつたからこそ、自分は死なずに、今もここですべて生きています。一度は死を覚悟したのに：勿論、その後もだ、常に死と隣り合わせで生きてきた。いつ、どこで、誰に殺されてもおかしくない商売、と、それが師の口癖だったから。だから、常に死を覚悟してきた。

けれど：彼が、自分の前から姿を消したと同時に、その覚悟も去ってしまった。それまで、死を強調するかのように求めてきた自分が、今度は生を強調し、求めるようになったのだ。その変化には正直驚いた。あんなに生きる事を拒み続けた自分が、と。それほど彼は自分にとって、偉大だったんだ、と。

他人から必要とされた事のない自分を、初めて必要としてくれた彼を、こんなにも自分が必要としていたなんて：そう思うと何だかおかしかった。

もう一本、と、煙草を手に取り火をつける。どうやらこれが最後の一本らしい。今でも、煙草の匂いは嫌いだ。それでもやめられないのは、いつか彼が言った言葉のせいと、自分自身の誓いみたいなものだ。彼を探し、見つけるその日までの誓い。いや願掛けと言った方がいいか。とにかく彼を見つけ出したら聞きたい事がある。なぜ、自分の前から姿を消したのか？この答えを聞くまでは死ねない。

それまでは、誰にも殺されずに生きるから……だから、もし、またあなたに逢えたなら、今度はちゃんと、生と決別しよう。きっと、まだこうして自分が生きているのは、あの日の延長線みたいなものだから。

だから、自分は今日も人を殺す。明日も明後日も……生きる為に、存在を主張する為に。彼から教わったモノは、これだけだから。

いつの間にかフィルター付近まで火は近付いていた。それに気づかないとは……反射神経が鈍くなったなと一人苦笑した。そして、やっぱり健康の為に、数は減らすかと吸い殻で山のようにになっている灰皿を見つめてそう思った。

第5話

『不健康な男』

終わり

第6話『似た者同士』（前書き）

どうも、

この連載も、もう6話目ですね。

いつも会話文ばかり書いているので、文章表現がおかしいと思うとこが多々あると思いますが、そこは目を瞑ってやって下さい（笑）

国語が出来ない日本人なんです。

と、まあ無駄話はここまでにして、
それでは、スタート

第6話『似た者同士』

「あの頑固爺さんが死んだ」

それを聞いたのは、先日、遊落龍で情報屋を営む水仙が、店に訪ねて来た時の事だった。

「死んだっていつ？」

「昨日、弟子が買い出しに出てる間にさ。」

「病気が何かか？あの頑固爺さんが病気にかかるとは到底思えないが……」

「いいや、違う。詳しい事は、あたしも調べてないから知らないが、どうやら殺しの線が強いらしい。」

「殺し……まさか、」

「あたしも、そう思ったが、どうやら本当の話みたいだね。」

店主達の会話に登場する『頑固爺さん』と、呼ばれる人物は、店主達同様、遊落龍の住人で武器屋を営む名は源治郎、通称ゲンと呼ばれる人だった。

「殺しだとしても一体誰が…」

「さあ、分からん。だが、『No.』に手を出すぐらいだ。相当の大物か、はたまた馬鹿か…どっちかだろう。」

「確かに。」

以前、話に出てきた事があるのを覚えているだろうか？この遊落龍には、『secret No.』と呼ばれる人達がいる事を。『secret No.』とは、言わばその道のスペシャリストで、水仙は情報屋の、店主は殺し屋の『secret No.』を与えられている。

この源次郎という人物も、遊落龍から、『secret No. 7』のナンバーを与えられていた。

「…で、水仙は俺にゲンを殺した人物を殺してくれと？」

「まさか…『No.』に手を出したんだ。そいつは深角が放つておかないだろ？見つけ次第に殺されるだろうさ。」

なるほど…と、店主は納得した。彼女の言う通り、『secret No.』に選ばれるという事は、この街のルールを取り決める役割を担っている。それには、暗黙の掟があり、『No.』を与えられている者には、絶対に手を出さないという事、源次郎の様に、その掟を破り、『No.』の者に手を出した場合は、闇に葬りさられるのだ。

「じゃあ、何しに来たんだ？」

店主は、聞いた。彼女は、煙管を吹かし、めんどくさそうに、こう答えた。

「『後釜』さ。」

「なるほど…」

「来週のこの時間、牡丹の店に召集だそうだ。」

「『secret member』が久々に集まるのか…いつ振りだ？」

「『No.9』が死んで、狐が後釜に着いた時振りだ。」

「ああ…あの時か」

「あたしらが集まるのは、誰かが死ぬ時ぐらいさ。」

皮肉なもんだがね、と、水仙は笑った。

「それにしても、黒龍門の狐…」

苦虫を潰したかの様な顔をした水仙に、店主はどうしたのか、と聞いた。

「どうしたつてもんじゃないさ…あの男、『N o ・ 9』を与えられたからと調子に乗って、好き勝手暴れてるらしい。あたしの知り合いもどうしたもんかと嘆いてる。」

「あの男は、強欲と云うか傲慢と云うか…」

「気に喰わん。あの笑顔を見てると、虫酸が走る。」

「同じく。」

と、店主も答えた。それを横目で見ながら水仙は、それと…と続けた。

「お前の女の紹介屋、アイツも嫌いだ。」

「元だ。今は違う。」

「そうか…それは、悪かったな。」

眉間に皺をよせ、間髪いれずに訂正をする店主に、水仙は、笑いながら謝った。

「この前、あの女と仕事したらしいな。」

「ああ…」

「お前とあの女は、切っても切れぬ仲って奴かね。」

「冗談…ただの腐れ縁だ。」

「どちらも同じ事だろ？」

「響きが違う。」

強情だな、と言わんばかりに手をあげ、盛大な溜め息をついた。
店主は、そんな彼女を睨みつけた。

「そう睨むな、美人が台無しだぞ？」

水仙は、からかうように店主にそう言った。

「男に美人って…せめて、男前と言って欲しい。」

「そうだな、悪い。」

うなだれる店主をよそに豪快に笑う水仙だった。

「さて…と、そろそろ帰るか、」

「悪かったな、わざわざ。」

「いや、構わんさ。顔を見にくるついでだと思えばな。」

「…そうか。」

「じゃあな、と言つても、来週には、また逢うが…」

「行きたくないがな。」

「それはあたしも同じだ。だが、行かなきゃ深角と牡丹が小姑の様にうるさいからな。」

「言えてる、」

「あの男も嫌いだな。アイツは一癖も二癖もある男だからな。」

「そつだな。」

ま、向こうもあたしの事は嫌いだと思うがな。と、彼女が笑いながら言うので、それはどうか、と否定しようと口を開きかけた店主だったが、水仙は、一瞬にして笑みを消し、真剣な顔をして、店主にこう忠告をした。

「あの男に取り入れられるなよ。決して、隙を見せるな。あの男は、偽善の塊だからな。」

普段の彼女からは想像もつかない顔つきだったので、店主は一瞬、驚いたが、直ぐに分かったと彼女に返事をした。

店主の返事に、よしっ、と頷いた彼女は、いつもの彼女に戻っていた。そして、そのまま出て行こうとする彼女に、店主は呼び止めた。

「何だ？」

「水仙は、決まった相手はいないのか？」

「つまり恋人はいないのか？」と、店主の唐突な質問に彼女は目を丸くした。

「急だな…まあいい、」

「前から気になってた。で、いるのか？」

「いないと言ったら？お前はどつする？」

「立候補するよ。」

「止めとけ。気持ちは嬉しいが、こんな年寄りを相手にしたっていい事なんざ何にもないさ。」

「年寄りなんかじゃない。俺とさして変わらない。」

「七つがさして変わらないだと？今、世の中の年増を全て敵に回したな。」

明日から外を歩くのを気をつける事だな、と、さつきとは打って変わった雰囲気、店主はそう忠告された。

「あんたが、俺と付き合ってくれたら気をつけるよ。」

「…本気か？」

そんな彼女の冗談混じりの忠告にも、笑わず答える店主に、水仙はそう聞いた。

「本気だ。俺じゃ嫌か？」

「嫌ではないさ、むしろ光栄だ。」

なら、問題ないな、と、店主が口を開こうとするのを制し、彼女は、だが…と、言葉を後に続けた。

「それなら余計にお断りだな。」

「なぜ？」

「お前とあたしは似た者同士だ。そんな二人がくつついたところで、上手くいきゃしないさ。」

「そんな事分らないじゃないか？」

「分かるさ…お前とは、長い付き合いだからな。ま、こんなところで年寄りを口説くより、もっといい女を見つける事だな。あんたなら、直ぐに見つかるさ。」

今度こそじゃあなと、振り向かずに、手だけを上げて出て行く彼女の背に、また、降られたか、と、店主は溜め息混じりに手を振り替えた。

第6話

『似た者同士』

終
わ
り

第6話『似た者同士』（後書き）

いつもありがとうございます、

今回のお話如何でしたか？店主のちょっとした恋バナみたいになつてましたね。

てか、店主以外名前があるのに、未だに主人公は店主って…名前考えなきゃなあゝ

それに殺し屋の話なのに、あんまり仕事してないし（笑）
まあ、そこはスルーしといて下さい。

ハードボイルドを目指してる割には、ちゃんと書けてるのか心配で仕方ないです

文才無いからなゝ

ま、何とかボチボチ頑張っていけます！！

これからよろしく願います

第7話『花街屋・朱雀』

その店は、遊落籠の中心に位地していた。同様の店が並ぶなか、一際妖しく光るネオンの灯りがやけに眩しかった。

『いらっしやいませ…お客様、お一人様ですか？』

店主がその店に足を踏み入れたと同時に、店の女中らしき女に、そう声をかけられた。

いや、悪いが客じゃない…そう断りをいれようとした時、奥から一人のそれはそれは目映い遊女が出て来た。

「お待ち…そのお人は客じゃないよ。」

「牡丹様…!!」

「久しいね…元気だったかい？『No.4』。」

店の女中に、『牡丹様』と呼ばれた女は、遊落籠の総ての花街を取り仕切る、『花街屋・朱雀』の店主で、名を牡丹と言う。彼女は、誰もが称賛するその美貌で、年齢18にして花街の頂点の称号『No.6』を手にした。

「ああ、久しぶりだな。俺は元気だよ。牡丹は調子はいいのか？」

店主が、彼女の挨拶に答えていると、女中は店主に深く一礼してその場を去った。先程、牡丹が店主に向かって『No.4』と呼んだのを聞いて、彼が『secret member』の一員だと気付いたからだ。

「あたしかい？あたしは、まあまあと言ったところかね…」

そう答えた彼女だったが、体は以前に見た時と比べて一回り痩せ、覇気も少しばかりだが、衰えた気がした。…これはあくまで噂だが、何やらよくない病にかかってしまって、それが直る見込みがないとか…まあ、それはあくまで噂だから、と、店主は、その事には触れず、そうかと、ただ一言だけ彼女に返した。

「もう、他の皆は集まってるのか？」

「集まってるよ…お前さんと姉さんだけさ。」

まあ、お前さんは今来たがねと、彼女は店主に言った。

「そうか、水仙はまだか。一番最後じゃなくてよかったよ。」

「馬鹿かい？全然、よかないよ。時間ギリギリじゃないか。他の皆は、三十分も前に集まってるよ。全く…お前さんと姉さんときたら…昔から、どちらかが必ず最後にやって来てたねえ。」

呆れ顔で、そう言う彼女に、店主は、面目ないと軽く頭を下げた。それを、仕方がないね…と、彼女は笑った。

「それにしても、姉さん…」

「…遅いな。」

「あの人も雲のようなお人だから…お前さんと一緒さねえ。」

そう呟いた彼女は、入り口の右手にある大鏡を見て、手櫛で2・3度髪を直しながら、惚れてるんだろ、と、店主に尋ねた。

「…何がだ、」

「姉さんにさ。本気で惚れてるんだろ？」

「…分かるか？」

「嫌でも分かるさ…お前さんを見てりゃあね。あたしらと姉さんを見る目が違う。」

ひいきだね…と、からかうように笑う彼女に、あたし『ら』とは、誰だと店主は尋ねた。

「柊だよ…お前さん、あの子と付き合ってる時から、姉さんには特別に態度が違ってたろ？…あの子いつも愚痴ってたよ。」

「…気付かなかった、」

「当たり前さねえ…そんな態度、微塵もお前さんにや見せちゃいないんだから。あの子は、あんたに真剣に惚れてたんだから。」

牡丹のその言葉に、返しようがない店主は黙り込んだ。

「まあ、いいさ…済んだ話だから。それより、お前さんは姉さんに
伝えないのかい？」

「一週間程前に伝えた。」

「で？」

「見事に降られた、理由は、似た者同士だからだと。」

「…そうかい。まあ、あのお人を射止めるなら、一度ぐらいじゃダメさねえ…長期戦になると思うが、しっかり頑張んな。応援ぐらいはしたげるよ。」

「…どうも。」

姉さんも罪なお人だね…と、心の中で思い留めて、彼女はホントに遅いと、呟いた。

「全く…これだから年寄りは…」

「おい…水仙の耳に入ったら…」
「年寄りで悪かったな」

そう店主の声に割って入ったのは、待ちに待った最後の『sec
ret member』だった。

「遅いよ、姉さん…何をチンタラしてたんだい？」

「ここに足を運ぶのが嫌でな、わざとに遅れてきた。」

悪びれる様子もなく、はっきりとそう答えた水仙に、牡丹は相変
わらずだ、と苦笑した。

「一週間ぶりだな、」

「ああ、どうやら今回は俺が先みたいだ。」

笑顔で挨拶する水仙に、店主も笑ってそう答えた。

「さ、我が儘な年寄りが来たところで、そろそろ行くとするかねえ……いつまでも深角を待たせては失礼だから。」

「はっ、あの男など知れた事か！幾らでも待たせとけばいいさ。」

「何て事を言うんだい？いくら姉さんでも許さないよ？」

「止めろ、二人とも。」

二人の言い争いに割って入る店主に、水仙は黙っていると、横目に見た。

「お前は、あんな男のどこがいいんだ？」

「どこって、全部さ。顔も器も権力も、総て兼ね揃えているじゃないかい……姉さんこそ、何でそこまでして深角を嫌うのさ？」

世の中の女は、絶対にあのお人を選ぶのに……と、付け加えて、牡丹は水仙に尋ねた。

「だからさ、……だからあたしは嫌いだ。総ての女が、自分に惚れてくれると勘違いしてる、あの神経が癪に障って仕方ない。」

眉間に皺をよせ、そう答える彼女の隣で、確かに、と、店主は一人納得した。

だが、牡丹は違つたらしく分からないと言わんばかりの顔で水仙を見て、こう言った。

「ま、姉さんには一生かかっても分かんないだろうさ、深角の男らしさは。」

「そんなもん分かりたくもない。」

間髪入れずに答えた水仙こそ、非常に男らしいと、二人の会話を聞きながら店主は思った。

「おつ、と……もうこんな時間……無駄話は切り上げて、本当に行くとするかね。もう、とづくに時間は過ぎてる。」

懐中時計を懐から取り出し、牡丹は二人にそう告げた。仕方ない

から行つてやるか、と、悪態をつきながら歩き出した、水仙を、はいはい、とあしらう牡丹と、何も言わずただ二人を見て笑う店主がいた。

第7話

『花街屋・朱雀』

終わり

第7話『花街屋・朱雀』（後書き）

どうも、

いつも読んで下さってありがとうございます。

一話完結を目指してるので、ページが短かったり長かったりとムラがありますが、そこはご了承下さい。

さて、今回はsecret memberの集まりの直前みたいな話になってましたが、次回は、いよいよsecret member全員登場となります。

…が、ここで一つ緊急事態が…

全員の名前が決まっていないう事（笑）

殆どは、決まってるんですが、約2名…店主も入れて3名決まってません。ので、これから真剣に考えたいと思います。

凝った名前は何か嫌なのでナチュラルな名前を…

と、いうことで、皆さんまた次回に

第8話『やる気のないヤミィ』（前書き）

どうも作者です、

すいません、タイトルなんじゃそらって感じで。

このヤミィですが、人の名前です。外国人ではありません、日本人です。

まあ…何はともあれ、スタート

第8話『やる気のないヤミイ』

今日から、この俺が『N O .』持ちとはね…男は、くわえ煙草で鮮麗された長い廊下を優雅に歩く。そんな自分を、奇異な目で見てくる客や、手を振る遊女達を、横目に見ながら、男はくだらないと言わんばかりに、それらを無視して前を歩く。

そんな男の態度が癪に障ったのか、一人の遊女が、男に向かって、この玉無し、と、叫んだ。その遊女に周りは、大いにざわついたが、そんな騒ぎにも、男は変わらず無視をして、見たことあるのか、と、笑いながら呟いた。

約束の時間はとうに過ぎている、しかし、どうってことはない。怒られたらその時はその時。第一、自分は今日ここへ来るとも言っていないのだ。ある日突然、男がやって来て、今まで『N O . 7』と呼ばれていた爺さんが死んだので、お前が今日から『N O . 7』だ、と、いきなりそんな事を言われても困る。こっちの都合も考えて貰わないと…、と、文句を吐きながら、男は目の前の扉を開いた。

「遅い。」

開口一番に、そう呟いたのは、入り口から向かって奥の、長方形の形をした長机の先に陣取る『N O . 1』と呼ばれる男だった。

「すまないね…深角、少しばかり年寄りが、駄々をこねてね…」

と、自ら深角と呼んだ男の機嫌を伺いながら、牡丹は自分の席に座った。彼女の後に続いて、水仙と店主も腰を下ろした。

この空間は、いつ来ても馴染めないな…と、店主は辺りを見渡す。牡丹の店は、純和風の造りになっているのだが、『secret member』や、遊楽籠に住む要人達が、内密な話をする時に使うこの部屋だけは、西洋仕様になっている。

前に一度だけ、その理由を尋ねた事があつたが、明確な答えが得られるわけでもなく、ただ、の先代の気紛れだろう、と、教えられた。

まあ、どうでもいいがな、と、店主は辺りを見渡すのを止め、前に向き直った。

店主が前を向くと店主の向に座る、柊と目があつた。

「…何よ？」

「…別に」

と、答えた店主に、怪訝な顔で更に何かを言うとしたが、それは、

彼女の一つ分隣に座る『No.9』の声によって遮られた。

「5人…」

彼は、溜め息混じりにそう言うと、水仙と店主の顔を見た。その意味が分からず、店主は何がだ、と、尋ねた。

「取り立てが出来た人数。お宅等が遅れて来た時間の間に、それだけの人数の取り立てが出来ました。どうしてくれますか？」

「そうか、それは残念だな…狐よ、これが終われば、頑張つて取り立てに行け。」

謝りもせず、そう吐き捨てる水仙に、店主と牡丹は苦笑いを浮かべた。

狐と呼ばれた男は、相変わらず怖い人だ…ね、と、言い方はおどけているが、その表情は歪んでいた。

ここで、少し、皆が座っている席順を説明しよう。一番奥に座る『No.1』事、深角。彼の右手側縦列に、水仙、店主、牡丹、そして、『No.8』の死体屋、王嶺。左手側に、『No.3』の運び屋の龍、柊、一つ空けて、狐の席順になっている。一つ空けてい

る席は、これから、『N O ・ 7』を与えられる新入りの分。

その空いている席に目を向けた牡丹が、まだ来ていないのか、と深角に尋ねた。

「まだだ、場所と時間は伝えたんだがな。」

「そう怒るな、深角。何か事情があるんだろう。今日から『N O ・ 8』だと、いきなり言われても戸惑いつてもんがあるしな。」

そう笑いながら話すのは、『N O ・ 3』の龍だ。彼は、遊楽龍で運び屋をやっている。頼まれた物は何でも運ぶ、例えそれが自らの命に危機が及ぶような品物だとしても、そう語る彼は、大らかな性格の持ち主で、誰からも慕われる兄貴肌、店主は少しだけ苦手だと感じた。と、同時に、彼はこの遊楽龍には似つかわしくない人物だろうと思った。

「…如何なる事情があらうと、遅れてくるのは、人としての倫理にかける…」

龍の言葉に、怒り混じりで返した、この男の名は、王嶺といい、『N O ・ 8』を与えられている。死体屋をやっている彼は、顔を見

せる事を嫌い、いつも顔の半分以上を、覆う黒いマスクを着用している。

「倫理ねえ…」

狐は、そう鼻で笑った。それが、気に障ったか、王嶺は目の前の男を静かに睨み、何か言いたげだな、と、彼に尋ねた。

「別に、ただ、死体屋のあんたに、そんなもんが存在したとはね…、と、思っただけ。」

「それを言えば、お前もそうだろう、」

狐に向かってそう言う水仙に、牡丹が、よせ、と、咎めた。

「…やけに、俺に絡みますね…水仙さん。」

「別に、気のせいだろう?。」

「何か気に入らない事があるなら、言ってくれば直しますよ。」

「…言っても無駄だろう、全てが気に入らないからな。」

「ちょっと、姉さん…いい加減に…」

「どうも…すみません…来る途中に道に迷った人を助けて遅くなりました。」

牡丹の言葉を遮って、ドアを勢いよく開けて登場した人物が、誰が聞いても嘘だと分かる理由で遅刻を詫びた。そんな、気の抜けた人物を見て牡丹は、怒る事を忘れて、まじまじと固まったように見つめた。

「あれ…何かお取り込み中ですか？俺に気にせずどうぞ。」

男は、只ならぬ雰囲気を感じたのか、ダルそうな声でそう言った。

「新人、一つだけ忠告しておく…次に嘘をついたら、命はないと思え。」

深角が、男にそう忠告した。男は、その忠告を聞いても動じず、
はいはい…と、気のない返事で返した。

「み、深角…この子が、新しい『No.』なの？」

柊が、深角に尋ねた。深角は、そうだと頷いた。

「皆さん、よろしく…爺さんが死んじまったから、その跡目に何故
か俺が決まっしてしまいました…これから、『No.7』を名乗りま
す、ヤミイって呼んで下さい…」

「ヤミイ…随分と変わった名前だね…」

「ああ…本名じゃないっすよ？皆さんと一緒にの偽名です。」

牡丹の呟きに、男が答えた。

「ヤミイとやら、お前は、幾つだ？」

「あ、21つす。もうじき22」

水仙が、若いなと彼に笑いながら言った。どうやら、彼女はヤミイを気に入ったようだ。

「ヤミイ、その空いている席に座れ」

いつまでま、入り口でダラダラと喋る彼に深角が席に座れと促した。彼は、言われた通りに柵と狐の間の席に腰を下ろした。

「1111、禁煙」

くわえ煙草の彼に、狐は灰皿を出しながらそう言った。あ、どうも、と、その灰皿を受け取り、煙草を押し付け消した。

「いや、美人ばっかつすね。」

ヤミイは、牡丹、柊、水仙を見ながら、そう言った。そして、その美人に挟まれている店主に目を合わせ、女？と聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「…見たら分かるだろう？男だ。」

「あ、すみません…すげー地獄耳っすね。髪の毛長いし、女の人かと思いました。」

店主に、そう詫びた。

「何で、そんなに髪の毛長いんですか？」

「それをお前に答える義務はない。」

彼の問いに、店主はそう切り捨てた。

「そんな怒らないで下さいよー美人が台無しっすよー」

彼が笑いながら言った一言が、気に入らなかった店主は、凍り付くような鋭い殺気を彼に向けた。

「お前、どうやら命がいらならしいな、」

「ちよっ……」

席を立つ店主に、牡丹は慌てて宥めようと、手を延ばしたが、それを拒否するかのように店主の殺気が増した。周りが一息呑む中、深角が、動じず、店主に声をかけた。

「やめろ、苦勞して見つけたんだ…殺すな。」

「あたしも嫌だが深角に賛成だ。また集まるのは面倒だからな。」

と、同じく動じない水仙が店主に座れと言いつけた。店主は、殺気を解き、悪かったと、水仙に謝った。そして、殺気を向けたヤミイにも、済まなかったと、詫びた。

「いやいや、俺が悪かったんで、すいませんでした。もう言いませんから。」

だから、その物騒な物閉まって下さいと、相変わらず気のない言葉で付け加えた。店主は、仕込み武器に気付いていたのか、と、不本意だが、感心した。そんな店主を見て、これでも武器屋ですからね、と、笑った。

なるほど…この気の抜けたアホ面が、後釜と聞いた時は、どうしたもんかと嘆いたが、確かにあの源次郎の跡を継ぐには十分だ、と納得した。

「…どうだ、意見があればきくが？なければ、このまま解散だ」

深角が店主の考えを組み取るかのように、尋ねた。

「あたしは、賛成だ。」

「俺も、異存はない。」

水仙と店主が答えた。

「あたしもさ、柊はどうだい？」

「賛成よ。」

「俺も賛成だな、よろしくな、新入り」

牡丹と柊、そして龍が賛成だと口を揃えた。

「二人はどうだ？」

「…まあ、俺より下っ端が出来るのは賛成ですよ」

と、濁した言い方をした狐に、ただ、頷いただけの王嶺。深角は、よし、決まりだな、と、ヤミイを見た。ヤミイは、至らないですけどよろしくと最後まで気の抜けた声だった。

「では、これで話は終わりだ、解散」

深角の声に、皆一様に席を立ち部屋を後にする…それを一番後ろから眺めるヤミイ。彼は、店主の背を見ながら、久しぶりに面白くなりそうだと、心で呟いた。

彼の目に、興味と言う名の炎が灯った。

第8話

『やる気のないヤミイ』 終わり

第8話『やる気のないヤミイ』（後書き）

いかがでしたか？

これで、やっとメンバーが揃いました。

此処に一応、それぞれのNo.と名前と職業を、補足として載せときますね。

No.1	貿易屋	深角
No.2	情報屋	水仙
No.3	運び屋	龍
No.4	殺し屋	店主
No.5	紹介屋	柊
No.6	花街屋	牡丹
No.7	武器屋	ヤミイ
No.8	死体屋	王嶺
No.9	金貸屋	狐

と、なってます。

それと、No.の数字ですが、これは、序列を表している訳ではないです。

遊楽龍の職業を種類別に分けた数字になっています。

では、これしか職業はないのか、と言うと、違くて、他にもありますが、上の職業が最も重要視されているだけの事です。

と、まあ補足は以上、それでは次のお話で、

あ、最後に、No.4店主となっておりますけど、名前じゃないんで
(笑)

まだ、決まっていから店主とさせてもらってます、

では、改めてバイバイ

第9話『生きている意味』

誰か、教えて下さい。私の生きる意味を…

『は、これだけ？もっと持っていないの？』

『ないよ…私も、これが精一杯だから…』

『…ちょっと、財布見せなさいよ！！』

『あ、』

見窄らしいアパートの一室から、聞こえてくる会話。派手に着飾る女と、その女とは正反対な服装をした若い女のやり取り。そのやり取りから、到底二人が親子だとは思わないだろう。

しかし、彼女達は正真正銘、血を分け合った親子なのだ。

『何だ…あるじゃない。ここに、』

そう言つと、派手に着飾った母親が、娘の財布から、丁寧に折り畳まれた一万円札を取り出した。

『それは…』

『何よ？』

『そのお金は、今月の食費代なの…だから、それがなきゃ、私、ご飯が食べられない…』

『食べなきゃいいじゃない？』

『えっ……』

『あんたが、我慢すればいいだけの事でしょ？』

母親は、娘にそう吐き捨て、取り出した一万円を自分の懐にしまい込んだ。その動作を、娘はただじっと見つめていた。

そして、母親は娘に向かい、また来月ね、と、一言だけ言い残し、部屋を後にした。残された娘に、夕陽だけが暖かく照らしていた。

ああ……私は、もう……、娘の心の中で、何かが途切れた。

その日、店主は久しぶりに店を開けた。理由はないが、強いて言うなら気紛れに勘が働いた、らしい。ドアにかけられているOPENの札が、強く吹き付ける風に揺らされていた。

店主の気紛れな勘は、よく当たる。それが、良いか悪いかは、分からないのだが。まあ…仕事に繋がるので良い事なのだろう、と、店主は思っていた。

しかし、暇だ…人っ子一人現れない。どうやら、この気紛れな勘は、珍しく外したみたいだ、と、揺れ動く事を止めぬ札を眺めながら、ため息を1つついた。そして、奥で相棒の手入れでもするか、と、動きかけた、その時、待ってました、と、言わんばかりに、ドアの音が1つ鳴った。

「あの…」

「…いらっしやいませ」

「ここは、その…お金を払えば、人を…」

「ええ…殺しますよ。」

遠慮がちに、店主の様子を窺うように、話す客に、店主は笑顔で答えた。その様子を見て、客も安堵の笑みを見せた。

「さ、此方へどうぞ。」

店主は、客に席を勧めた。それに、客は黙って頷き、勧められた席に座った。

「で？依頼内容は？」

「あ、はい……」

店主は、客が席に着くなり本題に入った。

それに少しばかり客が驚く。客にしてみれば、何か、一言、二言、たわいもない会話をしてから本題に入るものだ、勝手に思ったからだ。そんな客を横目に、店主は、別に少しばかりの世間話をして支障はないが、大した話題も持っていないので、本題に入ったのだ、と、心の中で、誰に聞かせる訳もなく呟いた。

「母を…私の母を殺して欲しいんです。」

「なるほど…理由を聞かせてもらってもよろしいですか？」

店主は、客にそう尋ねた。すると、客は、細く疲れきつた目を閉じ、一言だけ、我慢の限界、だと述べた。そんな客の様子を、店主は、ただジッと見つめていた。そして、一つ間を空け、分かりました、と、殺人依頼を了承した。

「ありがとうございます…あ、そうだ、私まだ名前を…」

店主に御礼を述べ、思いだしたかのように、名前を名乗ろうとした客を、店主は制した。

「あなたの名前はいいです。どうせ、これっきりの付き合いだ。聞いても何の意味も持たない。あなたの事は、『お客さん』と、呼ばせて貰います。」

文章にすれば、冷たい感じが見受けられるが、店主から発せられた声は、そんな印象はまるでなかった。それが、客にも伝わったみたいで、分かりました、と、客は納得をした。

必要以上に干渉はしないし、興味も持たない、それが、店主の作ったルールだった。昔、一度だけ必要以上に客と関係を持ってしまった事がある。獲たものなど何もなく、ただただ、後味の悪さだけが残されたのだった。あの時みたいなのは、二度と御免だ、と、学

んだ事を生かし、店主はルールを作った。

ふと、店主が目にした客の手、痺割れてうつすら血が滲んでいた。この街には珍しく、普通の仕事をしているんだな、と、店主は手を見て思った。きっと、皿洗いか、何かだろう…この寒い時期の水仕事はキツいな、と、思った。そんな店主の視線を感じとったのか、客が、酷い有り様だろう、と、苦笑いを浮かべた。

「…こんなボロボロで…恥ずかしい…」

「そんな事はありませんよ、お客さんが、一生懸命生きてる証だ。」

「だいいいんですが…」

そう言うと、客は顔を伏せた。そして、店主にこれから話事は、ただの女の独り言だと思って下さい、と続けた。

「ある所に、バカな女がいたんです。これは、その女が小さい時の話です。その女は、小さい小さいアパートで、知らない男性と出て行ったきり、何日も帰ってこない母親を、毎日、待っていました。恥ずかしい話で、家にはお金がなく、それに、まだ小さかったので料理の作り方を知らなかった女は、食事もろくに取れず、ただひた

すら母親の帰りを待っていました。そんな女を不憫に思った女の父親は、一緒に暮らそうと、何度もアパートを尋ねてきました。しかし、女はそれを頑なに拒否し続けたんです。なぜなら、父親にはすでに新しい家族がいて、とても自分が入れるモノじゃないと知っていたからです。」

「それでも、父親は情があつたんでしょう。自分の存在を、快く思わない新しい家族の反対を押し切り、何度も足を運んだ。そして、女にも、また情があつたんです。父親には新しい家族と幸せになつて欲しいという情が。まあ…それだけが断り続けた理由ではないんですが…」

と、喋っていたのを一旦止めて、何かを思い出したのだろうか、おもむろに鞆からハンカチを取り出し、それを目尻にあてた。店主は、そんな、客の前に、真っ白いカップに注がれた温かいコーヒーを、黙って置いた。それに、御礼を述べ、また客は話始めた。

「…女は、母親の手を放せなかったんです。どんなに冷たくあしらわれても、彼女の手を放す事はしなかった。父に捨てられ、身寄りが無い母は、頼る人を知らない孤独な人で、私までもが、手を放してしまえば、本当に母は、一人ぼっちになってしまふから…ずっと一人で生きてきたモノに、また一人になれと言うのは酷でしょう？だから、私は、ずっと、母のそばにいと誓ったんです。親は子を選ぶけど、子は親を選べない…私には母が親なんです。何をされ

ても…」

客は、それまでとは一転した暗い表情で、でも、と、続けた。

「でも、もう疲れてしまいました。私が、この手を放さなければ、いつか分かってくれる、いつか気付いてくれる、そう思っていたけど…母は、気付くどころか、益々、酷くなる一方で…いつしか大きくなり、働き始めた私に金の無心をするようになりました。…最初は、私も我慢していました。けど、一万が二万になり三万、四万と金額が増えていき、とうとう給料の殆どを母に渡すようになりました。…これで終わりだから、と、泣きつく母に、横には首を振れずに、今まで来てしまったんです。…そして、一昨日、母が私のアパートを尋ねて来ました。その時に、いつもは泣きついて、これつきりだからと言う母が、まるで人が違ったみたいに、私にこう言いました。『また、来月、』にと、…その時に私は気付いたんです。私が生きているのは、ただ母の為に金を用意するだけなんだと…母の手を放さないように、母を孤独にしないように、と、一生懸命頑張ってきた、それら総ては、意味を持たなかったんだと。私の独りよがり、母はそんな事微塵も思ってくれなかったんだと…。そして、今まで、ずっと張り詰めていたモノが、音を立てて切れてしまったんです。」

全てを話終えた彼女は、店主に、すいません下らない話をして、と、謝った。店主は、彼女にいいえ、と、笑って答えた。

「それじゃあ、これで失礼します。コーヒー、とても美味しかったです。誰かに淹れて貰った事なんてないから。」

「そう言っ貰えれば光栄です。…それでは、詳しい話はまた後日に改めて。」

「はい…」

客は、頭を1つ店主に深々と下げて、帰って行つた。さつき自分に向かつて話したあの話、途中から『女』が、『私』に変わつていたのを彼女は気付いていただろうか…いや、きっと気づいてはいない。ただの無意識だつたんだろう。

『また、来月』、そんな、たわいもない一言に、彼女を鬼へと変えたのか、…いや違う、彼女を人へと変えたのだ。母親の人形として意のままに生きてきた彼女が、その一言のおかげで、人としての意思が芽生えたのだ。

…何とも皮肉な話だ、と、店主は、飲み干された真っ白いコーヒーカップを眺めた。

第9話

『生きている意味』

終
わ
り

第10話『悪魔の申し子』（前書き）

更新が遅くなり誠に申し訳ありませんでした。
相も変わらず駄文ですが、読んでやって下さい。

第10話『悪魔の申し子』

後悔なんて、この先きつとしない。そう言い切ったのに…何故だ
ろつか、この胸にかかった靄が未だに消えてくれないのは。

『それでは、明日、ターゲットを殺害します。』

『はい…よろしくお願いします…』

『どうしました？浮かない顔をして…』

『い、え…』

彼女が、店主に殺害予告を伝えられたのは、昨日の事だった。それはあまりに突然で、しかし、確実にやってくるものと分かっていたからこそ、覚悟は決めていたのだが、いざ目の当たりにしたら矢張り戸惑うもので、…そんな彼女の心を知ってか知らずか、店主はこう尋ねた。

『…止めますか？今なら、まだ出来ますよ。引き金を引くか引かないかはあなた次第です。』

『……やめ、ません…もういいんです。これで、』

そんな店主の問いに彼女は、戸惑う心に言い聞かせるかのように、そう呟いた。

『…そうですね、ならもう二度と、あなたに戻る道は無いと覚えておいて下さい。』

『……はい、』

店主の最後の一言が、彼女の胸に重くのし掛かった。

『それじゃあ、行ってきます。』

『あ、はい…気をつけて。』

『はい。』

そんな会話を交わしたのが、つい2時間程前。これから殺しを、しかも自分の母親を殺そうとしている相手に、彼女は、気をつけて、と、声を掛けたのだ。もし、この場に第三者の誰かがいれば、何とも奇怪だ、と、彼女を蔑むだろう。しかし、生憎ここには、店主と彼女の二人しかない。だから、その言葉に異議を唱える者は誰もいないのだ。

彼女を除いては。

店主を見送った彼女は、何故、自分は、店主に気をつけてなどと言ったのだろうか、と、自問自答していた。

昔は、優しくかった母。何よりも自分を愛してくれた母。そんな母が変わったのは、父と離婚してからだった。原因は今でも分からない。父に聞いても母に聞いても、返ってくる答えはお互いを罵り責める言葉。彼女は、その答えに嫌気がさし、いつしか尋ねるという事を止めたのだった。

もうすぐ母は…、彼女は目を閉じ、優しくかった頃の母に想いをはせるのだった。

「いい加減にしろ…」

そう店主に言い放ったのは、『No.8』の死体屋・王嶺だった。

「何だ？」

「何だ、と？…貴様、死体1体の処理ぐらいで私を呼ぶな。私は貴様の召使いではないのだぞ？」

「悪い…別にそんな風に思っていないんだが、頼める死体屋がお前

ぐらいしかないもんでな。…いくらになる？」

「……どうだろうな、外傷の損傷はそれ程ではないが、中身が問題だな。どんな生活してたかは知らんが、肝臓・腎臓その他諸々、全く使いもんにならん。…売るとするなら、中身は棄てて、器を死体コレクターにでも引き渡すしかないな。」

「それでいい。やってくれ。」

割に合わない仕事、と、嫌味と文句を垂れる王嶺に、店主は苦笑いを浮かべながら、そう頼んだ。

「こちらの取り分は、売り上げの50%。それで文句がなければ、な。」

「文句なんてあるもんか。後、金はいつでもいいから、」

そう言いながら、帰ろうと立ち上がった店主を、待て、と、王嶺が引き止めた。

「貴様、何故死体屋を呼んだ？」

自分と呼ばずとも、そのままそこに捨て置けばいい話。それなのに、何故、自分呼んだのか、王嶺はその疑問を店主にぶつけた。

そんな王嶺からの問いに、店主は笑いながらこう答えた。

「金が取れなくなる前に、取っただけだ。」

「取れなくなる？どついう意味だ？」

店主の答えに、王嶺は意味が分からんと、首を傾げた。そんな王嶺に店主は、そついう意味だ、と、一言だけ残し闇に消えて行つた。その店主の一言に、なる程、と、何かを納得したように、王嶺もまた踵を返し、闇に消えて行くのだつた。

『あの子は悪魔よ!!』

それが、女の最後の言葉だった。店主と対峙した時、死を悟った彼女は自分の娘をそう罵った。許しを乞う事も、命乞いをする事も、これまでの行為を省み反省する事なく、彼女は、ただ娘を責めて死んだ。店主に喉を一突きにされて。

あの子は悪魔…その台詞が店主の頭の中で延々と繰り返されていた。

カチカチ、と、刻一刻と時計の針が進み、店主が出てから三周目と半分に突入した。

彼女は、未だに帰ってこない店主の帰りを、ただ、ジツ、と、待っていた。その度に溢れ出てくる楽しかった頃の思い出を振り払うかのように。

あの頃に帰りたい。しかし、それはもう叶わぬ夢、何故なら母は…そう考えては頭を振り払う。その繰り返しだった。

自分が母を…本当に母を？時間が経つにつれて、彼女は急に何とも言わぬ不安に駆られた。母が居なくなる、自分の前から…この世から…もう、二度と逢えなくなる…と、思ったら居ても立ってもいられなかった。

店主に頭を下げてなかった事にしてもらおう。今なら、きっと間に合う。そう自分に言い聞かせ、彼女は、ドアに手をかけた。

しかし、無情にもその願いは叶わなかった。何故なら、彼女がドアを開ける前に、店主によってドアが開かれたからだ。それは、死と云う絶望を意味する事だった。

「何処へ行かれるんですか？」

店主は、ドアを挟んで対峙した彼女にそう問う。分かってはいたが、あえて知らぬ振りをして聞いた。しかし、彼女はその質問には答えず、いや正確には答えられずに、店主の顔を、これでもかと言うぐらいに、目を開かせ見て、一言だけ尋ねた。

「母は…？」

とてもか細い声だった。

「無事に終わりました。」

店主は、はつきりと彼女に伝えた。それを聞いた瞬間に彼女の体は、ドサツと、崩れ落ちた。店主は、それを受け止める事をせず、ただ見つめていた。

一時の時間が過ぎ、少し落ち着きを取り戻した彼女が、店主にこう言った。

「後悔、する事は…絶対にはないと思いました…けど…」

「今は、後悔で一杯ですか？」

店主の声に、彼女は小さく頷いた。

「母が憎くてあなたに依頼したのに…今は、あなたが憎くて仕方あ

りません…我が儘、だと…あなたは悪く思つかもしれませんが…」

彼女は、顔を伏せたまま店主にポツリ、と漏らした。そして、彼女はこう続けた。

「母は…私を恨んで…」

「あなたを悪魔だ、と。」

店主が、母親の最後の言葉を彼女に伝えた。その言葉を聞いた彼女は、声を殺して泣いた。

何度も、ごめんなさいと、母親に許しを乞うかのように泣きじゃくる彼女を店主は、哀れだと思った。そして、そんな彼女を慰めるでもなく、むしろ追い詰めるかのような言葉を投げかけた。

「僕は言いました。あなたに戻る道は無い、と。それを聞いた上であなたは納得した。あなたには、幾度も引き返すチャンスはあったんですよ、…しかし、それをしなかった。それは、本当のあなたが母親を憎んでいたからですよ。」

「っ…違う!!」

「いいえ、違います。今、あなたが流した涙は悲しみではなく、喜びの涙。」

「やめてっ!!」

「あなたは、ずるい人だ…自分の手は汚さず、他人に母を殺させ、そして今、悲劇のヒロインを演じようとしている。先ほど、あなたは”後悔”などと口にしたが、それは、母親の命を奪った後悔などではなく、母親を殺してしまったという後悔。…つまりあなたが本当に後悔したのは、今まで憎しみだけを抱いてきた母親が、この世から消えてしまったという事実に後悔したんですよ。愛される事に恵まれなかったあなたは、憎しみこそが生きる全て…それが、母の死と共に消えてしまった。ならば、これから自分は何の為に生きていけばいいのか、それが、あなたが先ほど口にした”後悔”ではありませんか?」

店主が全てを見透かしたかのように、彼女に問うた。店主の問いに、今の今まで、ヒステリックに叫んでいた彼女だったが、その態度を一変させた。

「何で…何で分かったの」

「…あなたと昔の俺が、良く似てたからですよ。」

「……そう。あんたも苦労したのね…、」

そう店主に言うと、彼女は、鞆から煙草を取り出し、吸ってもしいかと尋ねた。店主は、どうぞ、と、彼女に答えた。彼女は、ありがと、と笑いながら火をつけた。…微かに火をつける手が震えていた。

「…あんたの言う通りよ、あの女を殺した事をすごく後悔してるの。…この二十年間、あの女への恨み辛みだけで生きてきたから、その対象が消えたと思ったら、今までの自分が一体何だったのかって虚しくなって…」

ほんとに馬鹿な女…と、彼女は、天を見上げ呟いた。

「あの女の言うとおりだわ…あたしは、悪魔ね。自分の母親を意地だけで、生かし、殺したんだから。」

そう言うと、彼女は立ち上がり店主に一礼してから、店を後にし

ようと、外に出た。

「でもね、こんな悪魔でも、一瞬だけ人間の感情があったみたい。
…一瞬だけ、ど…」

決してこちらを振り向かず、それだけ言い残し彼女は、去った。
店主も彼女に背を向けるように、後ろ手にドアを閉めながら、こつ
呟いた。

「あんたは悪魔なんかじゃないさ…本当の悪魔ってのは、」

そう一瞬置くと、目を閉じ、いつかの、嫌になるぐらいに聞かされ
た台詞を吐き捨てた。

「本当の悪魔ってのは、『俺達』みたいな者を言うんだよ。…なあ、
そうだろう？」

その言葉が、誰に問うものなのかは定かではないが、店主は、暗

い暗い闇に向かって問いかけた。

店の外からは、車のブレーキ音と、野次馬達の甲高い悲鳴が聞こえた。

店主は、それを聞きながら、矢張り死体屋を呼んで正解だったなと、店の奥に消えていった。

第10話

『悪魔の申し子』

終わり

第11話『度胸のある者』

「すみません、旦那。さっきまで居たんですが…どこをほつつき歩いてんだか…」

粗茶ですけど、と、茶を出しながら彼は、店主にそう告げた。

あの人は雲のような人だから、と、愚痴を零すこの男、前にも話したが、水仙の身の回りの世話をしている名を『ソウ』と、言う。

「いや、いいさ…急に來た俺も悪い。」

ありがと、と、ソウから茶を受け取りながら、店主は、茶を啜った。

「それにしても旦那、今日は、また何用で？」

仕事の依頼以外で、この店を訪れる事が滅多と無い店主に、不思議そうにソウは尋ねた。

「いや、近くを通りかかったから、水仙の顔でもと思っただけだ。」

「そうですか、それは本当にすまない事をしましたね。俺が是が非

でも、水仙様を引き止めておけば良かった…」

本当にすいません、と、詫びる彼に、店主はそんなオーバーな、と、笑った。そして、それに続けて、また来れば良いことだからとソウに言った。

「何を仰るんです…旦那がせっかく愛しい水仙様に会いに来たつてのに、そんな悠長な事言つてると誰かに持っていけますよ？」

「…ちよつと待て、何だ、愛しい水仙つて？」

ソウの発言に、飲んでいた茶を思わず吹き零しそうになった店主が、慌てて尋ねた。

「何だ、つて…そのままの意味ですよ？旦那が水仙様に惚れてるつて事。」

店主の慌て振りを後目に、坦々と答えるソウだった。そんな彼を見て店主は、いつから…と、語尾を濁して再度尋ねた。

「さあ…覚えちゃないですけど。まあ、強いて言つなら、まだ旦那があの人弟子だった頃からですかね。」

そう返ってきた答えに、店主は、そんな前からばれていたのか…と、頭をうなだれた。牡丹や柃に続きソウまでに知れているとは…自分は殺し屋失格だな、と店主は苦笑いした。

そんな店主を見て申し訳なく思ったのか、ソウはこう付け足した。

「そんな落ち込まないで下さい。…俺が旦那の気持ちを分かったのは、自分も同じだったからですよ。」

「…お前、」

「昔ね、俺の初恋は水仙様ですから。初恋は叶わないとはよく言っただもんですよ。あ、今は違いますよ。…今は、水仙様の事を本当の姉として慕わせてもらってます。」

そう笑いながら語る彼の言葉に、嘘はなかった。

そんな彼を見て、店主は何と返せばいいか分からず、そうかと、一言だけ返した。

「だから、あれですよ。弟としては、旦那に頑張って貰いたいんですけどね…」

そう言つと、ソウは言葉を濁した。彼が何を言いたいのかは、店主には、痛いほど分かった。彼が言いたいののは、水仙の心を支配している想い人、何処で何をしているかも知れない、生きているのか死んでいるのか分からない、我が師の事だった。

「あの人だけは、俺は許しませんよ……」

そう呟いたソウの表情と声は、静かな怒りに満ちていた。

「あの方は……旦那のお師匠さんは、水仙様の気持ちを知つてた。それを知つて、水仙様や旦那の目の前から急に姿を消した。何処へとも知れぬ地に逃げた。……その後、旦那も大変だったと思うが、水仙様も大変だったんですよ……ああいう性格だから皆の前では気丈に振る舞うんですが、誰も居なくなると一人泣くんですよ……声を殺して、体を丸めて……俺は、あの方の気持ちに答えてあげて欲しいなんて贅沢は言いません。けどね、何も答えを出さず去るつてのは卑怯つてもんでしょう？あの方がどれだけ傷ついたか……あの方を傷つける奴は、どんなお人であろつが、俺は許しません。」

まだまだ、自分は度胸のある者にはなれません、と、先程とは打つて変わった表情で、彼はそう言つた。しかし、店主には何の事やらさっぱり分からず、それは何かと彼に尋ねた。

「ああ、これは初めて水仙様に出会つた日に言われた言葉ですよ。……そうですね、あれは俺が１１の時、餓えに耐えかねた俺は、誰で

もいから金目の物を貰おうと、手にしたナイフで街へと向かいま
した。…けどね、11のガキがナイフで脅した所で勝てる訳なんて
なく…切羽詰まった俺は、次に出会った奴は殺してでも奪ってやる
と思いました。」

全くもって勝手な道理なんですがね、と、彼は苦笑いをしながら
店主に言った。

「その時の最後の奴つてのが…」

「ええ、水仙様でした。」

ソウは、当時を懐かしむかのように、目を閉じ話し始めた。

『おい、その女!…怪我しなくなったら、金目の物、全部置いていけ!』

彼は、ナイフを持つ手が震えるのを必死で隠しながら、そう水仙
に言った。彼の目は本気だった。しかし、水仙はそれに動じる事な
く彼にこう尋ねた。

『何故、お前にくれてやらねばならん?』

理解出来ないと言わんばかりの態度で、そう吐き捨てた。そんな水仙の態度に、ソウは怯んだ。それは、子供が想像した答えとは違うものが返ってきたからだった。

『何故って…そんなっ、何でもいいだろう!!早く、金目の物を出せ!!』

『…だから、お前にくれてやる理由もないし、道理もない。ガキ…悪いが、他を当たれ。』

あまりに自然に、じゃあな、と、通り過ぎようとする水仙に、ソウは待て、と、彼女のコートを掴み引き止めた。

『何だ?まだ何か用か』

『ガキだと思つてナメるなよ!!』

『別にナメちゃいないさ、…てか、お前、さっきから手が震えてるぞ。…大丈夫か?』

『っ…!!だ、大丈夫に決まってるだろ!!』

『そうか、それはすまん。』

と、取り出した煙草に火を付けながら、悪びれた様子でそう笑っ

た。それが癪に障ったソウは、彼女の前にナイフを突き付け、本気だと唸った。

『殺せないくせになんて思うなよ！！…人を殺す度胸ぐらいあるんだからな！！』

さらに一步前へと歩み出て、先程よりも彼女にナイフを近付けた。微動だにしない水仙を見て、これならいけると、思ったソウが、次に見た景色は真っ青に晴れ渡った空だった。彼は、水仙に思いきりに殴られたのだった。

倒れ込んだまま動かないソウに、彼女は怒り混じりにこう言った。

『いいか、クソガキ…人を殺す事に度胸なんて言葉二度と使うな。人様を傷つける理由に、そんなもんあっていいわけないだろうが？』

『じゃ…あ…どうすりゃいいんだ…俺…だつて…こんな事…』

泣きながらソウは水仙に尋ねた。彼女に殴られた頬が酷く痛かった。いや、それ以上に心が痛かった。

『お前、親は？』

彼女の問いに、小さい聞き取れるか取れないくらいの声で、
ない”と答えた。

『身寄りもか？』

その問いには、声も無く、首を縦に振るだけだった。水仙は、煙草を吹かしながら、子供に説き伏せた。

『…お前の気持ちは分かる。本当は、こんな事やりたくはないが、やらねば自分が死んでしまうから仕方なくやるんだという気持ちはな。けれどな、自分だけがなんて決して思ふな。…この街では、誰かが毎日死んで行く。生きていても生きていけずに死ぬ者、自らが命を絶つ者、誰かに殺される者。様々な理由で塵のように消えて行く。お前のような身寄りの無い者が、生き残ったのは奇跡と言っても過言じゃないだろうさ。』

『いつそ…俺も…死ねばよかつ…た…』

『けど、生きてる。お前は此処であたしとこうして話をしている。…奇縁というか何と言つか…』

そう言うと、水仙は暫く何かを考え、仕方ないかと、未だに寝そべる子供に手を差し出した。彼女の行動に、ソウは訳が分からず固

まっ たまま、怪訝そうに見返した。

『ん？…何だ。』

『いや…その、手…』

『あ？これが握手に見えるか？…起こしてやるから手をかしな。』

『あ、ありがとう……ございます……』

『いや、あたしこそ悪かったな、いきなり殴って。痛かったろ？体も心も』

そう言いながら、豪快に笑う彼女に、ソウは、小さく頷いた。そして、水仙はソウにこう切り出した。

『帰る当てがなければ、うちへ来るか？』

『えっ……』

『これも何かの縁だからな……だが、うちは、おてんと様に顔向け出来るような商売じゃないぞ。それでもいいならついて来な。ここで野垂れ死ぬよりマシだろ。』

『で、でも…俺、あんたを殺そうと…それにどこのガキかも分からない奴なのに……』

水仙の提案は、とても嬉しかったが、先程の彼女への行動が申し訳なく思い、下を向いてしまった。

『そんなもん気にするな。』

ただ一言、その一言をソウの頭に手を置き、笑い飛ばしながら言った。そんな彼女を見て、ソウは涙が出そうになった。彼女の姿が、とても大きく、眩しかった。

『で、どうする？まさか、女がここまで誘って断るいわれはないだろ？男なら恥をかかすんじゃない。』

『…よろしく、お願いします…』

『よし、決まりだな。』

ソウは、溢れる出る涙を止める事が出来なかった。男がそう簡単に涙を見せるな、と、頭を撫でられながら優しい声で水仙は言った。

『そういえば…まだ、名を聞いてなかったな。お前、名は？』

『…ソウです。蒼と書きます。』

『蒼か、いい名だな。あたしの一番好きな色だ。』

『あ、ありがとうございます…』

生まれてこの方、名前を褒められた事なんてなかったソウは、彼女に褒められた事が、嬉しくて、何だかくすぐったかった。

『ソウ…お前は、親を恨んでいるか？』

『…分かりません。分からないんです…物心ついたら、一人だったから…』

『そうか…』

こいつは、ずっと一人で生きてきたのか、と、水仙は、感心した。それと、同時に己の無力さに深く嘆いた。この街があるから、この様な、ソウの様な子供を増やしてしまう。この子に何の罪などないのに…この街があるから…何が『No』だ。そんなものに着いたとしても、何一つ変えられやしないではないか、と…。

『ソウ…いいか、これから先、辛く厳しい事など五万とある。この街は、そういう街だ。分かるな？』

『はい…』

『けどな、それら全てを許せる男になれ。…人を傷つける為の度胸

などと言わずに、人を許す事こそに度胸があるのだと、そう胸を張れる男になれ。…いいな?』

『はい!』

『いい子だ…なら、帰るか、家に。』

彼女との出逢いを語り終えたソウの目には光るものがあつた。店主は、それをただジッと見ていた。

「初めてしりましたよ、あの日。差し伸べられた手が、誰かの手がこんなに温かいんだと…帰るぞと言ってくれた声が、こんなに心地良いものなのか、と、ね。」

涙を拭いながら、水仙様に見つかったらどやされると、彼は笑つた。その笑顔に嘘は何一つなく、心からの喜びだ、と、店主は思つた。

『だから、旦那…早く水仙様を射止めて下さいよ?あの人を幸せにしてやって下さい。』

『そうしたいんだが、なかなか…な。』

半分冗談、半分本音で、お願いだと、手を合わせるソウに、苦笑いで店主は答えた。そして、約束があるからと、立ち上がり店を後にした。

『俺、やれます！人を殺す度胸ありますから！』

遠い昔、自分は彼と同じ言葉を口にした、そして同じ様に殴られた。店主は、立ち止まり目を閉じた。あれはそう…あの人に拾われてから、幾日がたった日の事だった。あの人に強く憧れ、あの人のようにと、我が師に弟子にしてくれと、そう口にした事を今でも覚えてる。

『…な、何で…』

殴られた頬を抑え、何故殴られたのか分からず、怒る師を見上げ、そう発するのがやっとだった。

『…いいか、耳の穴かっぽじって聞けよ？そして、決して忘れるな。人を傷つける為に度胸なんて言葉、二度と使うな。そんなもんあっちゃあならねーんだ。どうせ使うんなら、人を許す理由に使い。胸を張って、俺は許せるって、そういう度胸のある男になれ。いいな？』

殺し屋の自分が言えた義理じゃないが、と、笑う師の顔がやけに眩しかった。

「まだまだ、俺はあの人を越えられないのか…」

彼女がソウに言ったのは、我が師の受売りだった事に、店主は、何とも言えない感情が、胸一杯に押し寄せてきた。そして、師と彼女の絆を、改めて思い知らされた事に、大きなため息を零した店主だった。

第11話

『度胸のある者』

終わり

第12話『疑問と矛盾』

どんなに優れたモノでも、使い続けると綻びが生じてくるもので、それは、この相棒も同じ事。一生涯を共にするならば、年に何回かの手入れをするのは当たり前であり絶対必要。そのやってきた何回かの手入れの時期に、店主は頭を悩ませていた。

理由は、源次郎が死んでしまった事。

源次郎とは、以前この街で、『No.7』を名乗っていた堅気溢れる頑固な武器職人だった。店主と同じで、この街の出身ではなく、何らかの事情でこの街に流れついた彼を、街の住人達は、拒んだ。しかし、それは徐々に変化を見せ始める。持ち前の器用さと、頑な人間味に、憧れ慕う者が跡を絶たなかった。気がつけば、彼は誰からも認められる武器屋となっていた。

そんな彼と店主が出逢ったのは、街一番の武器屋がいると聞き、店主が彼の店を訪れた時だった。そう、店主が初めて他人に相棒を託す日だった。

託す、とは大袈裟かもしれないが、今の今まで店主のお眼鏡に適う武器職人が存在しなかったので、手入れは店主自らが行っていた。しかし、少し知識をかじったたげの人間では、やはり限界があるもので、今回のように、どうしたもんかと頭を悩ませていた時に、風の噂で源次郎の事を聞きつけ、彼に託してみるかと店主は思ったのだった。

あの時の事は、今でも深く覚えている。

これを、と、彼に相棒を見せた途端に、仏頂面の彼の表情がみるみるうちに変わり、店主に詰め寄りながら、幾らでも出すから売ってくれと、痛いくらいに掴んだ両肩を離さず、そう発した。そんな彼に、悪いが、と、店主が再三断つても、納得がいかないのか、諦めきれないのか、何度も頼み込まれた。しかし、最後には彼が渋々折れる形になり、売ってくれないならと、この相棒の存在価値と云うモノを、延々と聞かされた。

『決してコイツを手放すな。』

この言葉は、その時の彼の会話に七回、いや、それ以上に出てきたであろう言葉だった。

それから長い話が終わり、最後に彼が言った言葉が、この相棒を他の武器職人には触らせないで欲しいという懇願だった。そこまでして何故この相棒に構うのかは分からないが、彼の心の何かが、この相棒を深く望んだのだろう。店主は、分かった、と半ば無理やりの承諾をさせられ、その日、初めて、相棒を他人に託した。

そして、数日後、半信半疑で相棒を託した店主だったが、彼がいかに優秀な武器職人かというのを、見違える程に美しくなって返ってきた相棒を見て、初めて知るのだった。

あれから一体幾日の月日が過ぎただろうか、あの時の事をきっけに、彼とは随分と親しくなった。年齢も性格も自分とは程遠いが、

確かに感じとつた同じ匂いだけが、二人の関係を昨今まで作り上げて来たのだらう。

しかし、そんな彼も死んでしまった。見ず知らずの誰かに殺されて。詳しくは聞いていないが、水仙が言うには、殺しの犯人は、プロではなく、素人の線が高い、との事。なぜなら、この街の住人なら誰しもが知っている絶対ルール、つまり『No.』に手を出すという事は、己の死を意味するという事を理解しているからだ。

しかし、店主は腑に落ちなかった。

そこには大きな矛盾が生じるからだ。

『犯人は素人』、そこに最大の矛盾があつた。仮に犯人が素人だつたならば、何故、彼は無抵抗のまま死んだのだらうか。源次郎は優秀な武器職人だ。武器の扱いなどお手の物だらう。そんな彼が、素人相手に無抵抗のまま死ぬなんて想像もつかなかった。不意をつかれたかもしれない、水仙はそう言ったが、それならなおのこと可笑しい話で、店主の気配を察知する程、勘が鋭かつた彼が、素人の気配に気づかないなど有り得なかった。それに、何故その素人は、彼を狙つたのか、恐らくこの街の出身ではないであろう犯人が、彼の命を狙う理由が分からなかった。二人の接点が見えない限り怨恨ではないだらう。勿論、強盗でもない。では何だ？何がどうなり彼の死へと繋がつたのだらうか。考えれば考える程、その闇は深く、鍵を握る犯人は未だに見つからずじまい。上手く逃げたか、はたまた、もうこの世には存在しないのか、まあ後者だと思つが、この真相を知る者は誰一人として存在しなかった。

今は彼の死の真相に思いをふけている場合ではない、と、思い出したかのように、店主は、すっかり忘れていた相棒を手にとつた。

「さて、どうしたもんか……」

小さく吐き出した言葉は、ため息と一緒に消えていった。源次郎以上の腕前が西にはいたか、と、目を閉じ思いを張り巡らす。見知った顔が、何人か出てくるが、誰一人として彼と同等の力を持つ者ではなかった。

最高を知ってしまった後では、それと同等、もしくはそれ以上の存在でなければ満足しないのが人間の性というもので、店主のお眼鏡に適う人物が存在する事はなかった。一分前までは。

ふと、店主の顔に、先日出会った何ともいえないアホ面が印象的だった、新人がよぎった。やる気の無さがひしひしと伝わってくるあの男、あれならひよつとしたら源次郎と同等の力の持ち主かもしれない、と、店主は考えた。彼は、自分が仕込んでいた武器にも気づいた。恐らくあの場にいた者の半数以上が気づいていなかったであろう武器に彼は気づいたのだ。

どこか源次郎と似た雰囲気を漂わせる男、店主は、あんなアホ面にこの相棒を託すのは真に忍びないが、背に腹は変えられないと、渋々、席を立ち上がるのだった。

『疑問と矛盾』 終わり

第13話『西地区の住人』（前書き）

どうも、

いつも読んで下さりありがとうございます。

これからも、よろしくお願いします

それじゃあ、本文スタートです。

第13話『西地区の住人』

遊落寵には、様々な職業が存在する。それは、外の世界と同様に、ごく普通の職業から、とても人様に顔向け出来ないような職業までと幅広い。まあ、大抵が顔向け出来ない職業なのだが。

その中でも、一番人気の職業が、芸者や遊女などが集まる花街だった。なぜなら、薄暗く、まるで闇のような遊落寵において、その場所だけは別格だからだ。美しく、妖しい光は、闇によく映え見る者全てを魅了しつくす。そんな彼女等に憧れる者は跡を絶たなかった。

次いで二番人気なのが、意外にも武器屋だった。花街のように決して派手ではない職業、むしろどちらかというと、一日中武器と対面せねばならない地味な職業だ。そんな武器屋が何故、二番人気なのか？それは、やはりこの街ならではの、と、言った事情が存在していた。

『secret No.』の職業の内、最も安全な職業と謳われているのが、武器屋で、ついでに言うと店主の職業、つまり、殺し屋が最も危険な職業だった。

『武器屋が安全な職業？』

そう怪訝する人もいるかもしれないが、事実なのだから仕方ない。外の街なら、武器屋は危険な職業に位地するかもしれないが、それは所詮外の話。外では、常に国家警察や司法・立法と、絶対的な権

力が、早く過ちを犯さないかと、目を光らせているが、この街には、そんなものは何一つ通用しないし、無意味だった。

つまり、この街の住人の概念では、『武器屋だけは何の障害もなく気軽になれる職業』、だから二番人気なのだ。

だが、いくら安全な職業だからと言って、命を狙われないという保証は存在しない。武器屋への直接の怨恨などは滅多と存在しないが、国家警察と言うモノが存在しないこの街では、治安を維持する事がまずないので、別の意味での危険が溢れていた。

特に、遊落龍の北地区の治安は最悪で、女・子供は絶対に一人では出歩けないし、出歩こうものなら、身包みを全て剥がされ、女は娼館に、子供はバラされ中身を綺麗に売られた。

そんな北地区の隣、西地区一帯に武器屋は存在する。どこにどの店を出すかは、別に決められてはいないのだが、職業人数が多い、花街と武器屋だけは場所が指定されていた。つまり、西地区に住む武器屋の住人達は、北地区からの無法者相手に、常に気を張って生活しなければならなかった。

なら、東地区は安全なのか、そう聞かれれば間違いなくYESと答えるだろう。

何故なら、東地区には北地区の住人など遠く足下に及ばない、最悪の組織、黒龍紋がその名を轟かせているからだ。黒龍紋は、遊落龍の極道は勿論の事、外の世界にも傘下を持ち、今や構成員の数は計り知れないくらい存在する。そんな最悪の極道集団相手には、流石の無法者等も手出だしは出来ないと判断したのだろう。だから、い

つも狙うのは後腐れのない西地区なのだ。

賢明な判断だというか何というか、西地区の住人にしてみれば、傍迷惑もいいところだ。しかし、そのおかげと言ってはなんだが、武器屋の住人達は、他の者よりも気配を察知するのに長けていた。

「…何だこの店は？」

店主は、いつになく後悔していた。相棒の手入れを頼みに西地区に足を運んだのはいいが、目当ての店の看板を見た瞬間、何ともやるせない気持ちが入み上げてきた。

『ヤミイのハウス』

そうデカデカと掲げられた看板を見た者は、まさかここが武器屋、ましてや『secret No.』の家などとは想像もつかないだろう。お菓子の家…と、まではいかないが、この街には絶対に似つかわしくないメルヘンチックな建物だった。そんなヤミイの店を見た店主の体には、二度と味わいたくない衝撃が走った。

子供でも、もっとマシな名前を考える、と、店主は呆れ顔で入り口をノックした。

「はぁ…い…開いてるよ…」

店主がノックし終えたと同時に、中からやる気のない声が、そう返ってきた。そして、続けざまに、勝手に入ってと、許可が出たので、店主は、本当は入りたくなかったが、仕方なくお邪魔させてもらった。

店の中に入った店主は思わず目を疑った。理由は、あの恐ろしい程のメルヘンチックな外観とはかけ離れた空間が、そこにあったからだ。机はおろかイスすらなく、ただ有るのは、古びてはいるが、未だにその存在を知らしめるかのようにかけられた、何とも気高い一本の刀だけという殺風景なものだった。

「いらっしゃーい…何にしましょー…」

気怠そうに奥から出て来たのは、この店の主人のヤミィだった。

「いや、買いに来たんじゃないんだが…」

「じゃあ、何の用…って、あれ？あなた…」

強盗？と、心底だるそうに、顔も向けずに発したが、どこかで聞いた声だという事に気付いたのだらう。顔を上げ尋ね人が店主だという事を確認したヤミィが、こう言った。

「あんだ、『No』の人じゃん。えつと…確か、殺し屋だ。」

えつ、まさか俺殺されるの？、と、笑いながら店主を見た。店主はそんなヤミイに違和感を感じながらも、違う、と言答えた。

「何だ〜違うんだ。ま、いいや。それなら何しに来たの？」

「この相棒を手入れしてもらいたいんだが、」

と、店主はヤミイに相棒を差し出した。彼は、それを受け取りながら、てつきり消されるのかと思ったよ、と、店主に言った。

「ん…いい代物だね。これだけ使い込んでても、大した刃こぼれも無いし…これどこで手に入れたの？」

「俺に、それを答える義務はあるか？」

店主は、そう言いながら無駄話は好きじゃない方だ、と、付け足した。そんな店主に、ヤミイは驚く事も、怒る事もなく、興味の無い声で、『あ、そつ』と返すだけだった。

「どれぐらいで仕上がる？」

「んゝ…そうだな、2ゝ3日ありゃ、十分だね。」

そう店主に答えながら、彼は相棒を大事そうに抱え奥へ消えていった。暫くして、一枚の紙と鉛筆を片手に戻ってきた。

「これに住所書いてくれる？出来たら持ってくから。」

と、その紙と鉛筆を店主に差し出した。だが、店主は差し出された紙と鉛筆の受け取りを拒否した。

「悪いが、職業上の理由で住所はそう簡単に書かない事と決めてるんだ。」

だから、仕上がったら自分が取りに来る、と、ヤミイに言った。そんな店主に、ヤミイは薄っぺらい関心を見せたが、こう切り返した。

「悪いんだけど俺も取りに来られると思うといい仕事が出来ないんだよねゝ。ほら、何かゆとりがないじゃん？『あたし仕事が終わるまで待つてるわ』っていう女と一緒にでさゝそーいうの嫌いなわけだから、紙に書かなくていいから、住所言つて。頭に書いとく。」

そうダラダラとした感じで店主に主張した。そんなヤミイに、店

主が仕方ない、と、折れる形になり、一度しか言わないと、自分の住所をヤミイに伝えた。店主から伝えられた住所を、彼は4・5回繰り返し、その後、大きく頷いた。

「OK、完璧。じゃあ、2、3日後ね」

そう笑うと、ヤミイは踵を返し奥に消えようとしていた。それを見た店主は先程から感じていた違和感に気付き彼を引き止めた。

「何よ？」

ヤミイは、引き止められた事に少し驚いたのだろうか、意外な顔で店主を見た。

「お前、さっきから気になっていたんだが、この前と随分話し方が違うな。」

店主の感じた違和感、それは、彼が、自分に敬語を使っていない事だった。店主の問いに、ヤミイは、ああ、と、小さく漏らしこう答えた。

「…忘れてた。ごめん、じゃねえや。すいませーん。」

これでいい？と、言わんばかりに店主を見た。そんな彼に否定も肯定もせず、店主は、更にこう尋ねた。

「“消される”とは、どういう意味だ？」

「んゝ…そのまんまの意味っすよゝ。殺されるって事。」

「誰に？」

「誰か、に？」

一瞬、ほんの一瞬だけ、ヤミイの顔が険しいモノに変わったのを、店主は見逃さなかった。しかし、彼自身は無意識だったのか、自分の感情に気付いた様子はなかった。

「もう、いいっすか？俺、仕事したいんだけど。」

無言のまま自分を見てくる店主を、怪訝そうに見ながら、そう言っただ。

「ああ…引き止めて悪かった。それじゃ…」

「ああ、待って下さい……」

踵を返して店を出て行くこととする店主を、今度は、ヤミイが引き止めた。

「何だ？」

「ああ、先輩って……」

何かを聞いたそうな顔だったが、そう、言葉を濁した挙げ句、彼は、『やっぱりいい』と、店主に手を振った。店主は、そんな彼に少し引く掛かるものがあつたが、深く追究する事をせずに、そうか、と、店を後にした。ヤミイは、張り付いた笑顔で、ダラダラと手を振っていたが、店主の気配が感じられなくなると、その表情を一変させ店の奥へと消えていった。

「あの男、要注意だな」

店主は、ヤミイの店を出て、来た道を戻りながら、そう呟いた。

彼は何かを知っている。それは何か、と、聞かれれば分からないが、確かに知っている。それは、恐らく自分に関係するもの。それとも、この街全体に関係するもの、か？それを立証する事は出来ないが、一瞬だけ見せた、彼のあの表情が、全てを物語っていた。

もしかすると、源次郎も？そう店主は考えた。源次郎が殺されたのは、知ってはいけない何かを知ってしまったからか？だとしたら、

今まで矛盾だらけだった彼の死に辻褄があう。すると殺しを命じたのは、やはりこの街の誰かか？それも、自分が見知った者。源次郎とヤミイに共通点は、『西地区の住人』。それに見知った者は…、

「カア、カア！！」

と、店主が、頭の中で考えを張り巡らせていた、その時、一羽の鴉がけたたましく鳴いた。それは、まるで、この事を詮索するなどと店主に忠告するように思えた。それと、同時に、見えない”何か”が静かに動き始めようとしていた。

第13話

『西地区の住人』

終わり

第14話『最低なのは、』

「急にすまないな、牡丹。」

「どうつて事ないさね、あたしは、深角の役に立てて嬉しいよ。」

だから、謝らないでくれ、と、牡丹は深角に向かって微笑んだ。そして、これを、と、深角に頼まれた書類が入った封筒を差し出した。

「一体、こんなものどうするんだい？」

「いや、少し気になる事があってな……」

と、深角は、牡丹から差し出された封筒を受け取りながら、それ以上を口にはしなかった。そんな彼の口調と雰囲気から何かを察したのか、彼女は、そう、とだけ呟き、それ以上は追究せず、この話題は初めからなかった事と割り切った。深角もまた、牡丹の態度に、本当によく出来た女、と、静かに笑みを浮かべた。

「ねえ、深角……この後、何か用があるかい？何もなければ……その、食事でも、」

「すまないが、これから人と会う約束がある。」

だから無理だ、と、彼女が言葉を言い終える間もなく、深角は、そう伝えた。その言葉を聞いた牡丹は、その美しい顔を一瞬曇らせて、なら、仕方ないね、と笑った。

「本当にすまないな。また後日、改めて食事でもしよう。」

深角は、伏せ目がちな彼女の頬に手を添えて、耳元でそう囁いた。その言葉に、今度は一瞬にして表情は晴れやかなモノになり、牡丹は恍惚な目で深角を見つめ頷いた。

「お取り込み中、悪いんだけど。」

「狐：？お前さんいつから居たんかい？」

深角と牡丹の間に、嫌みを含んだ低い声が、割って入った。その声のする入り口の方へ牡丹が目を向けると、そこにいたのは、黒龍紋の若頭で『No.9』の狐が、壁にもたれて立っていた。

「いつから？いやだね、牡丹さん：姉さんと、『No.1』が見つめ合う前からいましたよ。それなのに気付いてもくれやしない。ま、『No.1』の方は気付いてみたいだが：それにしても、こんなにいる男がいるというのに、つれない人だね、姉さんも。そんなに惚れてるんですかい？『No.1』に。」

と、からかい口調で牡丹に話す狐を見て、彼女は、自分の名と同じ花が描かれた、赤い艶やかな着物にも負けないくらいの美しい笑顔を浮かべ、当然、と、答えた。

「はあ、妬けるね…同じ男として羨ましい限りだよ。…あんたは幸せ者だね、」

『No.1』、と、意味深長な言い方で深角を見た。そんな狐を、深角はさほど気にする様子もなく、牡丹に向き直り、彼女の漆黒の髪を撫でながら、また連絡する、と、一言告げた。その言葉の中にある2つの意味を理解した彼女は、分かった、と、部屋を後にするのだった。

「へえ…伊達に、花街を取り仕切ってないね…ちゃんと言葉の意味を理解してる。」

流石だ、と、狐は彼女を褒め称えた。そんな狐に、深角は眉間に皺をよせ、何しに来た、と、自分への用件を促した。

「本当あんたって無愛想だね…女には張り付いた笑顔をでも振りまくのにさ…男には眉一つ動かさないね。」

「動かして何の特になる？そんな事より早く話せ、俺は、この後に

大事な商談が控えているんだ。」

時間がない、と、中々用件を言わない狐を睨みながら、自分の腕時計を指差した。

「はいはい…分かりましたよ。」

なら言いますけどね、と、今までおどけた様子で、深角に話をしていた狐だったが、その口調を一変させ、こう切り出した。

「あんた、いつになったら親父を始末してくれるんだ？」

「また、その話か…」

どうやら深角は、彼が自分のもとへ尋ねてきた理由が、最初から分かっていたらしく、驚く事もなくこう返した。

「いいか、何度も言っているだろう？まだ、時期じゃない、と。時期がくれば必ず殺るし、お前に伝えると、な。」

後、何度言えば分かるか？と、深角は眉間の皺を更によせ、狐に尋ねた。

「時期っていつだ？あんたのいう時期を待ってたら、俺は爺さんになっちまうよ。」

と、いつもなら素直に引き下がる狐なのだが、今日は虫の居所が悪いらしく、なお喰ってかかった。

「そうかつかするな、時期ならもうすぐだ。もうすぐで黒龍紋の狸は死に、跡目の狐、お前が組長だよ。」

これedyouやく化かし合いにも終止符が打たれるな、と、深角は嘲笑った。

「だから、お前が口を挟む事は何もないんだよ、」

「…っ、」

と、深角は、有無を言わさぬ口調で狐にそう伝えた。その気迫が十二分に伝わってくる深角の表情に、狐は、ゴクリと、一つ喉を鳴らし、分かった、と、両手を挙げた。

「分かればいい、用はそれだけか？なら、さっさと帰れ。ここにお前が通ってるのを狸に見られれば困るのはお前だろう？」

「ああ、そうだね…」

狐は、嫌な汗をかいたと、手で額の汗を拭い踵を返した。そしてドアノブに手をかけて出て行こうとしたが、待てよ、と、引つかかるモノが生じた為、そのままの体勢で顔だけを深角に向け、こう切り出した。

「俺、姉さんに見られたけど…変な詮索とかされてないよね？」

「心配ない、あの女は良く出来た女だからな。今日、ここで、お前に会った事は、牡丹の記憶の中からは消えて存在しないものになっている。」

大丈夫？、と、尋ねる狐に、深角は、坦々と言葉を返した。その言葉を聞いた狐は、細い目を更に細くし、流石だね…、と、言葉を漏らし部屋を後にした。

彼が漏らした言葉は、牡丹に向けられたモノか、はたまた深角に向けられたモノか、誰も知るよしはなかった。

深角の部屋を後にした牡丹は、珍しく帰る道中ずっと考え込んでいた。なぜ、彼の部屋に狐が？、あの時は深角との食事の約束で頭がいっぱいで違和感というものが無かったのだが、よくよく冷静に考えてみれば、それがおかしい事と言うことに気がついた。

深角は、大事な話や、人に聞かれたくない話をする時は、必ず自室に呼ぶ。それはとても用心深い彼の昔からの癖だった。だから、自分はあの封筒を部屋に持って行つたし、それについて、彼が何も言わなかったのは、それは、深い付き合いの自分なら察するだろうと踏んだからだ。

だが、狐はなぜあの部屋に？おそらくあの二人にそんな深い付き合いはないだろうし、第一、聞いた事もない。さっきも言つたが彼は用心深い。これは失礼にあたるかもしれないが、狐のように腹の中では何を考えているか分からない人間を、彼は二番目に嫌つた。だから、そんな狐を部屋に招く…と、言つても押しかけていたに見えるが、それでも部屋に上げたという事は、何か大事な話があつたという事が…。

牡丹は、これ以上は詮索してはいけないながらも、何故か、その事が頭から離れなかつた。それは、多分、自分が彼に渡した封筒の中身のせいなのだろう、と、ため息を吐き出した。

「どうした、やけに浮かない顔だな？深角に会つたというのに、」

「っ…!？」

棘が含まれた言い方で、そう牡丹に後ろから声をかける者がいた。その声の主は、今、一番見つかつてはいけない厄介な相手に、牡丹は、激しく心臓が波打つのを何とか抑えながら、振り返つた。

「あら、姉さん…どうしたんだい？何か用かね…」

出来るだけ平静に、そう心に言い聞かせて、笑顔に努める牡丹とは対照的に、あからさまに不服な態度で、仁王立ちをする水仙が、そこにいた。

「何か用？随分な物言いだな…お前が、急ぎだと頼むから、黒龍紋の内部を一晩で調べあげて、くれてやったのに。」

「シッ、姉さん声が大きいよ、注意しとくれ…どこで誰が聞いているかもしれないのに…」

「そんな事しらん。それよりお前、あの書類が何を意味するのか理解した上であの男に渡したのか？」

「意味…？あんなものに意味なんてあるのかい？」

水仙の問いに、怪訝そうな顔で牡丹は答えた。その答えに、かかったと言わんばかりの水仙の表情はみるみる内に不機嫌なものに変わった。

「やはり、深角の差し金だったか…クソッ、調べるんじゃないかった。」

「あ、いや…深角は、」

「今更遅い！…それに、お前がこの話を持ってきた時から、奴が絡んでるのは目に見えていた。だが、確信が無かったし、それに、お前が、あたしを出し抜こうとするなんて信じたくなかったから、目を瞑ってやったが…」

深角、と、水仙の口から名前が出た瞬間、牡丹はその美しい顔を、面白いくらいに真っ青にかえ、慌てて取り繕うとするが、それを水仙に一喝させれた。

「姉さん、この事は、深角に…」

言わないでくれ、と、泣きそうに小さくか細い声で、水仙に哀願し、あのお人に知れたら嫌われると、なおも水仙に縋った。

「深角には、言わんさ…今日の事は、お前を信じたあたしも悪い。」

それに、言わなくてもあの男は最初から気づいていただろうしな、いや、最初からあの男の思うように動かされていたのだ、と、水仙は思うと、八つ当たりなのは、甚だ承知なのだが、牡丹へ悪態をつく事でしか、怒りを治められなかった。

今回の事で、自分が、もし、彼女の後ろに深角がいたと確信を得

たとしても、きっと、彼女の可愛さあまりに目を瞑って調べていただろう。それをあの男は利用したのだ。分かっている彼女を自分の所へと差し向けたのだろう。一步違えば、牡丹に危害が及んでいたかもしれないのに。

それぐらいに危険な仕事だったのだ。牡丹が水仙に頼んだ仕事は黒龍紋の内情など、牡丹からしてみれば、『あんなもの』に過ぎないが、それでも、その『あんなもの』が、喉から手が出る程に欲しい者が大勢に存在する。

それをあの男は…、この事を他言すれば、いくら『No.』だからと言つても、自分も牡丹も無事にはすまないだろう。自分だけなら誰かに言つたが、牡丹がいる。可愛い妹分を危険に曝すわけにはいかない。まんまと填められた、と、水仙は目を閉じた。

「…姉さん…？」

急に何も喋らなくなった水仙に、本当に申し訳無さそうな顔をしたら牡丹が、遠慮がちに声をかけた。

「…何だ、」

「…その、大丈夫かい、」

「これが、大丈夫に見えるか？」

「っ……、」

苛立った声で、そう水仙が吐き捨てた。その答えに牡丹は、一層申し訳無さそうに顔を伏せた。

嫌な沈黙が流れて、互いに無言のまま十分が過ぎた。牡丹は、これほどまでに水仙が怒る理由が分からなかったが、彼女が自分の事を氣遣って怒っているのだ、という事は、痛いほどに分かった。だから、今更だが自分がやってしまった事に後悔していた。

「…後悔するぐらいなら、最初からするな。」

そんな彼女の心情を見透かしたかの様に、水仙は言った。そして、大きなため息を一つつき、こう続けた。

「…今回は、お前も反省しているみたいだから、これで許してやる。だがな、次はないと思えよ?」

分かったか、と、牡丹に問う水仙は、もう、いつもの彼女だった。そんな水仙に、牡丹はありがとう、と、零れた涙を着物の袖で拭いた。着物が汚れるぞ、と、水仙は注意したが、構やしないさ、と、彼女は笑った。

「ほら、もう泣くな。こんなところをお前を慕う遊女達に見つかったら、どやされる。それに、目を腫らしたままで客の前に立つつもりか？」

本当に、この人は…、水仙の有り余る優しさに、牡丹は、更に目頭が熱くなった。

齢18で『No.6』の地位についた自分を、右も左も分らない自分を、本当の妹のようにいつも支えてくれた。

時には厳しく、時には優しく、自分を励ましてくれる彼女を、自分もまた、本当の姉のように慕っていた。

そんな水仙を裏切っても深角に尽くす自分が酷く醜くみえた。

けど、どうか許して欲しい。もう自分には時間がないのだ。刻々と死へのカウントダウンは近づいている。死ぬ最後まで愛する人の為に生きたい、と、たとえそれがひとりよがりな想いだとしても…それでも彼を愛するまま死んでいきたいのだ。何故なら、牡丹にとって深角が、生まれて初めて心を捧げた人だったからだ。

「ほら、もう帰るぞ、冷えたら体に障る。」

そう言いながら手を差し出す水仙に、牡丹は、コクンと、頷きその手を取った。

「昔は、よくこうして手を繋ぎ、お前を連れまわしたな。」

「そうさね…」

あの頃も、牡丹の手は細く美しい手だった。羨ましいと、何度言
った事か知れぬ。今も、その手は美しかった。しかし、あの頃に比
べて随分と細くなってしまった。それは、彼女の命が残り少ないと
云うのを、嫌というほどに知らしめる。

牡丹は知らない。彼女の病に自分が気付いているという事を。彼
女の命にはもう時間がないという事を自分は知っているのだ。彼女
は優しいから周りに要らぬ心配をかけたくはないと、ずっと沈黙を
通している。今も独りで死への恐怖と闘っているのだ。

そんな彼女に、奈落の底へと、突き落とす言葉はかけられなかった。
『あの男は、お前を利用していただけ』、その事実を伝えられた
らどんなに楽だろうか。だが、自分には出来ない。彼女の笑顔を壊
してまでも、それを伝える勇気が無かった。水仙は、彼女の手を強
く握り締め、本当に最低なのは、自分だ、と、自嘲した。

第14話

『最低なのは、
終わり』

第15話『興味がない者』（前書き）

皆さんこんにちは

久しぶりの小説更新です。

何かと忙しくなかなか更新出来ませんが、作者を暖かい目でお願いしますm（　　）m

それでは、駄文ではありますが、どうぞ。

作品途中で、『殺し屋を止めた』とありますが、間違いではありません。『辞め』を『止め』とわざと表記してあります。『終わる』と、いう意味で『止め』という字を使わせてもらいました。

第15話『興味がない者』

「私は非常に気分が悪いぞ…殺し屋」

「本当にすまない。」

そう、心底嫌そうな声で店主に告げたのは、『No.8』の死体屋、王嶺だった。彼は、顔の半分を黒いマスクで覆っている為に、表情こそあまりよく分からないが、彼の口調と身を纏う空気が、彼の怒りの度合いを嫌という程に知らしめていた。

では、なぜ彼がそこまでに怒りを抱いているか？と言うと、その理由は、彼よりも数分先に店主の店に訪れていた、やる気の無さが十二分に伝わってくる新入りが原因だった。

「ねえ、先輩？何でそんな真っ黒な格好してるんすか？てか、暑くないんすか？」

「……………」

「そのマスクの意味は何すか？コスプレっすか？」

と、先程から王嶺の身なりについて、やる気のない新人が、一方的に問い続けているからだった。

「ヤミイ…いい加減に黙れ」

見かねた店主が彼をため息混じりに叱る。だが、それでもヤミイの口は休まる事を知らなかった。

「死体屋って大体何人くらいいるんですか？てか、喋らない奴相手に商売して楽しいですか？」

「ヤミ…」

店主が、もう一度彼の名を呼びかけた時、構わないという意味なのか、王嶺が右手を出し店主を制した。

そして、ヤミイに向き直り、こう口を開いた。

「物言わぬモノを相手に商売しているのは、貴様かて同じだろう？そんな事も分かんくらいに貴様は阿呆なのか？」

「あ、そういえば…確かにそうっすね。」

すいませんでした、と、本当にそう思ってるとは誰も思わない声色で、ヤミイは王嶺に頭を下げた。

「でも先輩…阿呆は失礼っすよ」阿呆は。俺、ちゃんぽらんに見

えても結構頭いいんすよ？」

「知っている」

下げた頭を上げ、笑いながらヤミイは王嶺に言う。きっと、彼にしてみれば半分本気で半分冗談だったんだろうが、それを王嶺は真っ直ぐな目で彼を見据え、ただ一言だけそう彼に告げた。

王嶺から、そんな言葉が返ってくるとは考えてもみなかったヤミイは、普段はやる気のない虚ろな目を一瞬にして丸くし、彼を見返した。

それは、ヤミイだけではなく、後ろで彼らのやり取りを聞いていた店主も、同じ眼差しで彼を見た。

「ははっ…、まさか先輩からそんな言葉を貰えるとは…ね、正直きもち…」

「勘違いするなよ。私が言っているのは、貴様があまりに浅ましく非力だから、それをいかに人に見せぬように知恵を働かせるかというのを、知ってると言っただけだ。」

ヤミイがまだ話していたのを気にもせず、彼は、ヤミイにそう吐き捨てた。その言葉を聞いたヤミイは、丸くした目を、また一回り丸くし、意味を理解すると同時に一瞬にして鋭い目つきに変わり、

目の前の王嶺を睨みつけた。

「どういう…意味ですかね？…先輩」

明らかに、いつもの彼とは違う彼が、そこにいた。痛々しい殺気を王嶺に向け、やっとの思いでそう言葉を発する。

しかし、王嶺はさほど気にした様子もなくこう返した。

「意味など貴様が一度理解しているだろう？」

「…あんた、俺の何を調べた？」

調べる？、調べるとは何だ？、と、店主は考えを巡らせた。この新人の変わりようは一体…、あの時、彼の店に相棒を預けに行った時に一瞬見せた彼の本当の顔が、今ここにいる…。

店主は、二人のやり取りを注意深く見つめた。

「調べるだと？笑わせるな…貴様などに微塵も興味がないわ。はっぱをかけたつもりだったが…どうやら図星みたいだったな。」

「…な、」

「そんな事ぐらいで、いちいち感情を爆発するとは…だから、貴様は浅ましいのだ。」

「っ…てめえ!!」

「やめろっ…ヤミィ!!」

ヤミィは、武器屋には似つかわしくない俊敏な動きで瞬時に王嶺の後ろに立ち、スーツの袖に隠し持っていた小型ナイフを彼の左の首筋に添えた。

店主は、ヤミィのその動きを見て、頭の中で考えていた彼の本当の正体が、疑惑から確信に変わった。

「だから、言っただろう？」

「…あん…た、な…んで…」

「……………」

後ろから見れば、ヤミィの体制が有利なのは一目瞭然…、しかし、ヤミィの態度からは、そんな空気が微塵も感じられなかった。疑問に感じた店主は、急いで彼らに駆け寄った。

「…王嶺、…お前!？」

店主が駆け寄った先で見たモノは、後ろを取られながらも、全く動じず、曲げた左ひじから出ている仕込み道具を、ヤミィの心臓に向けて構える王嶺の姿だった。

「『だから貴様は浅ましい』と、何度言わせるつもりだ……もう二度目だぞ?」

振り返りもせず、王嶺は嘲笑いながら吐き捨てた。

「……………あんだ、死体屋じゃないのかよ?これじゃあまるで……」

「殺し屋だな……」

ヤミイの言葉を引き継ぐように、そう店主が言う。その言葉に、王嶺は昔の事だと、武器をしまい込みながら呟いた。

「ヤミイ……貴様かて、同じだろう。」

「俺……は……」

「相手の背後に周り、頸動脈にめがけナイフを当てる……殺し屋が最初に習う殺し方だ。……例え、お前が殺し屋じゃなかったとしても、殺しの訓練は受けただろう?」

店主が彼に問う。

「それだけじゃない…貴様は、常に俺の動きを察知し、俺が来てからは背中を絶対に見せようとしなかった。最初、メンバーの顔合わせの時に、殺し屋の仕込み道具を指摘したのは貴様だったが、それは、殺し屋がどうしても仕込んだ方の足を庇って座っていたのを見たからだろう？決して不自然ではない。だから、普通の者が見れば分からぬ。だが、殺しの教育を丹念に受けた者なら気付かぬ事は容易ではないからな。」

「最初から気付いてたとはね…」

「気づいていた訳ではない。ただ、疑問に思っていただけだ。」

「同じっすよ…疑問をもたれるようじゃダメだって…先生が言ってたし。」

「先生？」

「そ、先生。」

ヤミイは店主を見て意味深な笑みを浮かべながらそう一言返した。

「ああ…必死で今まで隠してきたのに、速攻でバレるなんてついてねえ…」

「何で止めたんだ？」

店主が、ヤミイに尋ねた。ヤミイは、うん…と、言葉を探しながら、疲れたから、と、答えた。

「先輩は…、何で止めたんですか？」

今度はヤミイが王嶺に尋ねた。いつものやる気のない目ではなかった。

「昔の話だ…」

そう言いながら、王嶺は顔の半分を覆っているマスクに手をかけ、外した。

「……………！？」

王嶺のマスクの下を見た店主とヤミイは、言葉を失った。右頬から左の顎までにかけて、大きな刃物傷が痛々しく存在していた。

「…昔、まだ人間というモノを信じていた愚かな自分が存在した頃に、最愛の者から、裏切られ傷つけられた。」

「…その相手は？」

店主が王嶺に尋ねる。彼は、目を閉じ傷に手を当てながら、殺した、と答えた。

「何で？ そんな…」

「理由など知らぬ。だが、人には感情があるからな…きっとアレも意味知れぬ何かがあったのだろうよ。」

興味などない、と彼は、また、マスクで顔を覆った。
それを、ヤミイは、いたたまれない様子で見っていた。

「貴様は、私に問うたな？ なぜ物言わぬ者を相手にするかと。それは、至極簡単な事だ。心がない相手だからだよ。…そう言った点では、私も貴様と同等で、浅ましいのかも知れぬな。」

そうヤミイに言うと、王嶺は長居したな、と、店主に一言詫びて、踵を返しそのまま出口へと引き返した。

「待てよ…!!」

ヤミイは、出て行こうとする王嶺を引き止めこう尋ねた。

「俺が…俺が、殺し屋を止めた本当の理由…聞きたくないのかよ？」

ヤミィの問いに、王嶺は振り向きもせず、こつ告げ店を後にした。

「何度も言わせるな、貴様には微塵も興味などない。」

「残念…降られたな。」

そんな、二人のやり取りを茶化すように店主が笑みを浮かべ呟いた。

第15話

『興味がない者』

終わり

第16話『黒龍紋の若頭』

「もしもし…あ、スギタサン？どーも、黒龍紋ですけど…今月の支払いどうなってます？…ちゃんと払えますよね？」

縁起の良い鶴と亀の模様をあしらった、恐らく何十万もするであろう特注の花梨矢弦彫のテーブルに、惜しげもなく長い足を乗せて、携帯電話で催促の話をするこの男、遊落龍で一番の名を誇る極道、『黒龍紋』の若頭で、名は狐。

「…何？用意出来てない？…ちょっと、勘弁してよ、スギタサン…返済は、明日の朝9時だよ？それまでに、1億集めて返して貰わなきゃ俺が親父に怒鳴られるんだけど？」

と、同時に『secret No.』の一員で、『No.9』を与えられている。

「…とにかく、明日9時までには1億必ず用意してね？出来なきゃ、あんたの身の回り全て売りさばくから。…人も物も関係なく、ね。では、よろしく。」

声色は優しいが、けっして、相手に有無を言わさない口調で、言いたい言葉だけを伝えると狐は、まだ相手が何かを言おうとしていたが、そのまま電話を切った。

「相変わらず阿漕な取り立てだな。」

「…鷹石さん…オハヨーゴザイマス。」

皮肉った言葉と声だけで判別したのか、狐は振り向きもせず、自分の後ろ手に立つ、鷹石と呼んだ男に軽く手を挙げ、挨拶をした。その態度が癪に障ったのか、鷹石は、狐に聴こえるように舌打ちを一つし、狐の向かい合わせに腰を降ろした。懷から煙草を取り出し、それに火をつけながら、こう切り出した。

「最近、黒龍紋の若頭の取り立てが厳しいと、お前の客から苦情がきてるぞ…。それに、毎日その対応ばかりで、下の者が困り果てているらしい。仕事に熱心なのはいいが、阿漕すぎると客も下もいずれなくなるぞ。」

「ふあっ…」

鷹石の忠告に、狐は欠伸をしながら耳を傾けて、終わると一気にまくし立てた。

「俺達は、極道だぜ？阿漕もへったくれもあるかよ。俺の取り立てが嫌なら、ここで金を借りなけやいい話だろ？こっちに金を借りてる分際で、文句垂れようってのが間違いなんだ。それに、電話番号が

嫌だとほざくんだったら、まともに金の取り立てが出来るようになってからほざけて、その下の者に伝えて下さい。未だに俺を越える程の取り立てが出来る奴はいやしねえ。」

教育係は何やってんだかねえ、と、嘲笑って鷹石を一瞥した。

「つまりは、俺が悪いって言いたいのか？」

「おっと……こりゃ失礼。教育係の鷹石さんの前で……何たる失態だ。今のは忘れて下さい。」

まるで、『非は自分にある』と捕らえられる狐の発言に、鷹石は眉を顰めて言葉を返した。そんな鷹石に狐は、誰が聴いても分かる程の棒読みで、謝罪した。

「狐……いい加減にしろよ？さっきから何だ、その態度は？それが兄貴分に対する仁義か！？」

どこか小馬鹿にしたような狐の態度に、鷹石は、怒りを露わにして怒鳴った。その姿は、流石は極道と言ったところか、堅気の者は勿論、まだ若いヤクザやチンピラなどが見たら、たちまち逃げ出すであらうぐらいの気迫が溢れていた。

だが、しかし、鷹石が本気で怒鳴ったところで、怯む相手ではなかった。なぜなら、彼が今、目の前で相手にしているのは、堅気で

もなく、ましてやチンピラでもない。歳は若い、それでも実質、黒龍紋と言つ任侠社会のNo.2なのだ。その肩書きは、伊達ではなかった。

「鷹石さん…そんなデケエ声でぎゃあきやあ怒鳴らないでよ？耳が痛い。それに、兄貴分つてアンタ言っけどさ…俺は、若頭だぜ？この組のNo.2だよ。アンタはただの教育係。分かるか？差は歴然だ。歳では上かも知れねえが、実力では俺が上だ。だったらアンタが言っ仁義つてのは、まず若頭である俺にアンタが通すもんだろ？」

狐は、机に乗せていた足を降ろし、鷹石に顔を近付け、ゆっくりと、確実に相手に分かるように一つ一つ丁寧に言葉を発する。顔は笑顔だが、彼の目は笑っていなかった。そして、尚も言葉を続けた。

「アンタのその足…」

そう言つと、狐は鷹石の右足を指差した。

「あんな事故がなけりや、今頃アンタが若頭の席に座つてたのにな…本当に残念だな。」

音にするなら、『ニヤリ』と、これ以上無いかのような極上な笑みで、狐は鷹石を見た。そして、近付けていた顔を戻して、再度足

を机に乗せた。その狐の一連の動作に、鷹石は忌み知れぬ恐怖を感じた。

「右足を引きずらなきゃ動けねえっていうんじゃ、若頭なんて勤まんねえよな。組長に何かあった時には、その身を挺してでも守んなきゃいけねえんだから。だから、あの事故さえなけりゃ、本当は、親父のお気に入りのアンタが若頭だったのに…それなのに、先代のお気に入りだった俺がなっちまって気の毒だよ…アンタも親父も。」

ま、引きずるぐらいの怪我で済んで良かったじゃない、と、未だに笑みを崩さないで狐は、鷹石の右足を見つめた。

「…ああ…そうだな…」

鷹石は、そう返すのがやっとだった。そんな鷹石の精一杯の返事を無視して、狐は、左手に煌びやかに光る何百万もする腕時計を見て、席を立ち上がった。

「俺、今から出てくるけど、後よろしく。」

「で、出てくるって…どこに…」

「先代の墓参り。もうすぐ命日だからね。…あ、そうだ。鷹石さんに言わなきゃいけない事があったんだった。」

そう言うと、狐は部屋の奥に幾つもある金庫の内の一つから、黒い袋を取り出して、鷹石の前に投げ捨てた。

目の前に投げ捨てられた袋を、鷹石は、怪訝そうに見つめて、おもむろに中を開けた。

「……っ!？」

中を見た瞬間に、鷹石は背筋が凍りついたように動かなくなった。袋の中には、目は腫れて潰れ、鼻は右に曲り、口の中には、有るはずの舌が見つからない、無惨な若い男の生首が入っていた。

「その興信所の男がさあ…最近、俺の周りをうろついてたんだよね…誰の差し金かは知らないけど。目障りだから、ボコしてバラしてやった。」

狐の言葉など、もう鷹石の耳には届いていなかった。ただ彼は、袋の中に入れられた生首をこれでもか、と言うぐらいに、真っ青な顔で見つめていた。

「だからさ…」

「っ!？」

いつの間にやら狐は、彼の背後に回り、両肩に手を置き、耳元に口を寄せて、こう呟いた。

「ソイツを俺に寄越した馬鹿をさあ…悪いんだけど、アンタ調べといてくれない？一人一人にその首見せて。」

「な、何を…」

「ソイツ雇ったの多分…組の中の誰かだからさ。」

「…こ、こいつが…喋ったのか!？」

「ん〜ん、喋っちゃないよ…?てか、喋れないじゃん?ソイツ舌無いし。」

狐は、ほら、と、顎で生首を差しながら、尚も耳元で呟く。

「も、もし…は、犯人が、見つかったら…」

鷹石は、恐怖に狩られそうになりながらも、狐に相手がもし見つかった場合には、どうするのか、と尋ねた。

「そうだね…、もし、犯人が見つかったら…こう伝えといてよ。」

一間置きながら、狐はこう吐き捨てた。

「今度は左足…ってね」

耳元にあつた筈の狐の顔が、気が付けば、正面にあり、その目は、射殺さんばかりに自分を見つめていた。

『今度は、左足』、彼が放った言葉が何を意味するかなど、誰に聞かずとも鷹石自身が痛い程よく分かっていた。彼は、最初から知っていたのだ。この生首と自分との繋がりを。知っていて、ワザと今まで知らないフリをしていた。彼は、その名の如く、真正正銘の狐だった。

「それじゃあ、よろしくね…鷹石さん。」

狐は、真つ直ぐ見据えたまま鷹石に伝えたと、踵を返してそのまま部屋を後にした。しかし、彼が去った今もお、鷹石は、まるでギリシャ神話に出てくる女神、メデューサに遭遇したかと思わせるぐらいに、その場から微動だにしなかった。

第16話

『黒龍紋の若頭』

終わり

第17話『親の心、子知らず』

昔から何を考えているか分からないと言われ、忌み嫌われ続けてきた自分が、他人に受け入れて貰える事なんて、殆ど皆無だった。最初は物珍しさと興味本位で、自分に近付いてくる奴はいたが、それでも、やはり自分の奇行な性格を気味悪がり、直ぐに離れて行った。

『黒川雅狼、享年32』

そう墓石に書かれた文字を、狐は手でなぞった。

ここに眠る雅狼という名の男は、誰もが気味悪がり、自分から離れて行く中で、唯一、自分を受け入れ腹心に据えた。一体、自分の何が良かったのだろうか？自分の何が、彼を認めさせ、側にいる事を許したのだろうか。

狐は、この雅狼という男が、よく分からなかった。しかし、一つだけ確かに分かっていた事は、任侠の世界で彼に勝る極道は、自分を含め他に、誰一人として存在しなかった。

「…ん？お前も来てたのか？」

狐が、墓前に手を合わせていると、後ろからそう声が聞こえた。その声の主に、狐は、ばつが悪そうな顔をしながらも振り返り、軽く挨拶をした。

「…どうも、」

「相変わらず細いな…お前は？ちゃんと飯は食ってるのか？」

狐の挨拶に、豪快な笑顔で言葉を返すこの男、狐と同じ『secret No.』の一員で、『No.3』を与えられた運び屋の龍だった。

「食べてるよ…あんたに言われなくたって。」

素っ気なく言葉を返す狐に、龍は、そうか、と、笑いながら、墓前に花を供え手を合わせた。その様子を、狐は、ただジッと見つめていた。

「もう、5年か…早いもんだな。雅狼が死んで5年が経った。」

龍は、閉じていた目を開き、墓前を眺めながら狐に話しかけた。

「5年か…本当に早いもんだな。この人だけは、絶対にくたばらないと思ってたのに…気がつきや、死んで5年が経っちゃった。」

そう顔を歪めながら話す狐を横目に、龍は、いつか雅狼と交わした約束を思い出していた。

『兄貴…もし、俺が死んだら、No.の跡目は狐にして欲しいと、深角に頼んでくれ。』

『狐に…？俺は構わんが…お前…』

『分かってる…だから、頭はちゃんと若頭の権堂に譲る。それで納得行かなくなつて無理やりにでも、納得させる。』

そんな話をしてから、10日後に弟は死んだ。幹部会へ行く為に乗った車のトラブル、と、いう名の不慮の事故で。いや、実際には殺人という名の方が相応しいだろう。誰がやったかなんて明確だった。

「なあ…何でこの人は死んじまったんだろうな。あんなんで死ぬよ
うな器じゃねえだろ？」

相変わらず顔を歪め、声を震わせながら狐は、龍に尋ねた。龍は、
そうだな…、と、だけ、狐に言葉を返した。

「黒龍紋の狼は、誰よりも気高い。あんな、薄汚い狸なんか、継いでいい訳ねえんだよっ…！」

「…やめろ。継いじまったもんは仕方がねえ。それに、権堂が頭になるのは、雅狼が認めた事だ。…お前がとやかく言う事じゃない。」

「あんたはいいのかよ！？てめえの弟が…血を分けた兄弟が…あんな奴に殺されたんだぞ！？てめえの親や兄弟が命張って守ってきた組をあんな奴に奪われて…よく平気でいられるな！？」

「平気な訳ないだろ…この世でたった一人の弟が死んだんだ。」

狐の問いに、静かに龍は呟いた。そんな彼に、狐は詰め寄り胸ぐらを掴み、尚、問いただした。

「だったら、何で、てめえが頭継がなかったんだよ！？弟殺した奴に渡すぐらいなら…てめえが…黒龍紋の龍の字は、初代がアンタの為につけた…」

「…やめろ」

狐の言葉に龍は、これ以上ないくらいの怒りを含んだ声で、一言、そう告げた。

「その話はするな。」

まるで修羅の如く、狐を睨みつけ、龍は、掴まれていた手を払い襟を正した。

そんな彼に、狐は恐怖と懐かしさを感じていた。

「…いいか、よく覚えとけ。黒川雅狼は、俺の弟である前に、黒龍紋という名の極道なんだ。そんな奴が綺麗な死に方なんて出来る訳ねえだろう？…こいつは、この道を行くと決めた時から、それを覚悟で生きてきたんだ。…それを…」

そう言いながら、龍は、狐に頭に大きな手を乗せ、先ほどの修羅のような顔ではなく、いつもの笑顔でこう続けた。

「それを、こいつが一番信頼していたお前が分からなくてどうするよ？ん？復讐なんて雅狼は望んじやいねえよ。こいつは、極道の最後という理にかなったただけなんだよ。…だから、あの時…」

あの時、自分に狐を託したのだ。我が人生の最後を悟ったから、雅狼は死に際に自分に逢いにきて、約束を交わして行ったのだ。昔拾った小さき狐が血迷わぬように。

だが、どうやらそんな彼の親心は、狐には届いていなかったらしい。彼が、今よからぬ事をしでかそうとしているのは、明白だった。

「今、お前がしようと考えてる事は、忘れる。それを一番こいつは

望んでいる。」

そう言いながら、グシャグシャと2・3度、狐の頭を乱暴に撫でて、龍はその場を後にした。

「…分かってるよ。あんたに言われなくたって…俺は、この人を誰より理解してんだ…」

狐は、振り返る事なく、そう小さく呟いた。
そして、溢れてくる涙を止めずに尚も呟いた。

「分かってるけど…やっぱり無理なんだっ…初めてだったんだよ…俺から離れないでっ…ずっと、側に居てくれた人は…あの人が初めてだったんだ…」

ずっと、一人だった。ずっと、一人だったから、一人を苦痛だと思った事はなかった。孤独というモノを知らなかったからだ。

だけど、初めて仲間が出来た。その仲間は、自分よりも年上で、自分よりも偉くて、自分よりも強い人だった。そして、初めて孤独は嫌だと教えてくれた人だった。

「もう…独りは…嫌だよ…何で…俺を置いてったんだよ…俺は、あんたの一番何だろう？…だから、」

自分を置いていったあんたが悪い、と、狐は溢れていた涙を一気に拭い、雅狼の墓前を見据えた。

「もう…俺に戻る道なんてないよ。…親父、次にあんたに逢う時は、ここじゃない、地獄だ。」

雅狼にそう告げた狐は、彼と過ごしていたあの頃の思い出を断ち切るように、踵を返してその場を後にした。

第17話

『親の心、子知らず』

終わり

第18話『正義を計る物差し』

『高田が死んだ。』

遊落龍では、今朝から、この話題で持ちきりだった。そして、それは店主の店でも同じことだった。

「おい、聞いたか兄ちゃん！？奴が…高田が死んだってよ！！」

closeの札がかけてあるにもかかわらず、その老人は、荒々しくドアを開け、店主に入店の許可も取らぬ間に、開口一番にそう発した。

「……爺さん、今日は、店は休みだ。そこに書いてあるだろう？…アンタ字が読めなくなるくらいに老いぼれたか？」

だが、慌てて店に駆け込んできた老人とは逆で、店主は、全く動じなかった。

「何悠長にしてやがるんだ！！高田が死んだんだぞ！？…兄ちゃん以外の住人は、皆、両手を叩いて祭りみてえに喜んでるよ！！」

まるで関心がない店主に、老人は、両手を頭の前に突き出す動作で、店主に詰め寄った。

そんな老人に店主は、近いと眉間に皺を寄せ、もう少し離れてくれと手を払った。

「奴が死ぬことなんざ目に見えていた事だろう？何を今さら……」

「そうは言っても、やっぱり祝わずにはいられねえよ。俺ア、奴のせいで、もう少しでムシヨ行きだったんだからな!!」

「そうか……最近見ないと思ってはいたが、アンタ、身を隠してたんだな。……てつきり死んだと思ってたよ。」

と、老人の前に、珈琲が入ったカップを差し出しながら、店主は笑ってそう言った。

「おつ、すまねえ……」

老人は、差し出された珈琲を受け取り、店主に礼を言った。そして、その珈琲を飲みながらこう続けた。

「俺が死ぬだと？冗談キツイぜ兄ちゃん。俺ア、この遊落龍で四つの時に親に捨てられ、それから野良犬みてえに凶太く生きてきたんだぜ？生ゴミみてえな飯食ったって病氣一つせずにな。そんな俺が

そう簡単にくたばるかよ。お勉強の学は無くとも、社会の学なら優等生よ。」

「そうか…ならいいが、最近の遊落龍では、その社会の学すら昔のようには通じなくなりつつあるからな、…一応気をつけろよ。」

店主からの忠告に、さっきまで威勢がよかった老人が、急にしおらしくなり、残り少ない珈琲のカップを覗きながら、『ああ…』と、呟いた。

「…源次郎の時のように、この街も随分と薄汚ねえ連中が増えるようになってしまった…。」

「源次郎がどうかしたのか？」

まるで、源次郎の死の真相を知っているかのような老人の口振りを、聞き逃さなかった店主は、気になり老人にそう問うた。

しかし、ハッと、我に返った老人は、何でもないとバツの悪そうな顔で店主の問いには答えなかった。

「源次郎のことより…高田の話だ!!」

尚も怪しむ店主の目をみずに、老人はさっさと話題を変えた。この話は聞かなかった事にしてくれと言わんばかりに。

「とにかく、奴が死んだからには、少なくとも俺達の生活は安息になるだろう…これで大手を振って街を歩けるよ。高田の奴、兄ちゃんとも来たんだろ？」

「ああ…、殺人鬼の店はここで合ってるかってね。」

「随分な言われようだな？」

「いや、そうでもないさ。本当の事だしな。」

「で？何て答えたんだ？」

「そうですが、それが何か？つて。」

さして興味がないと言わんばかりに、店主は老人に答えた。

「ぶはっ、流石は兄ちゃんだな！！奴の間の抜けた顔が思い浮かぶぜ！！」

老人は、そのやり取りを思い浮かべるかなように笑った。

店主達が話をする”高田”という男は、数ヶ月前に、外の世界の国家警察から配属されたばかりの中年警察官だった。

遊落龍に警察官が配属されるのは、実に10年振りで、それまでも交番というモノは存在していたのだが、この街の治安の悪さと犯罪率、そして国家警察が通じない無法地帯に怯える者ばかりで、遊落龍に配属されようものならば、皆一様に辞表を書いて辞めて行きたらしい。

そんな、名ばかりの交番に、10年振りに勇氣と度胸とかなりの癖がある、高田巡査部長が配属されたのだった。

『市民の安全と治安を守る。国家警察の名にかけて、犯罪者を塀の向こうへと送ってやる!!』と銘打って、彼は、正しくその言葉の通りに働いた。

そして、死んだ。

「何かと俺らにいちやもんつけて、ムシヨに入れようとしやがる…本当にアイツは、ここには不釣り合いな奴だったぜ。なあ、兄ちゃん？」

「そうだな…こんなとこに来なければ、長生き出来たのにな。」

「自分から遊落龍の配属にしてくれと頼んだらしいぜ？とんだ世間知らずだよ!!」

何故、彼は死んだのか？その答えは至極簡単だった。彼は、この街の住人に殺されたのだ。自分が守ろうと、汗水流して必死に働いた代償が、自らの死という何とも惨めな結果を招いたのだ。

彼は正しく常に正義を貫いた。弱き者を助け強き者を挫く、外の世界では当たり前で行いで、まるで、時代劇に出てくる隠居のような彼を、この街は拒み、そして排除した。

「ま、これに懲りて国家警察も暫くは大人しくするだろうさ。おつと、いけねえや…こんな時間だ！…じゃあな兄ちゃん！…珈琲ありがとよ！！」

ぐずぐずしてるとレースが始まっちまうと、老人は店主に珈琲の礼を告げ、入って来た時と同じで慌ただしく店を出て行った。そんな老人の背を見送って、店主は高田の死を思い返していた。

この街で悪のように扱われ死んだ男。己の物差しで、この街の正義を計れなかった哀れな男。正しい事をしたはずなのに、それは間違いのだと気付けなかった男の死を嘆き悲しむ者は、この街には誰もいない。そして男が存在していた事実は、もう明日にも住人達の記憶から消されて無かったモノとされる。

店主は、微かに己の心に存在する遣りきれない想いに目を閉じ、一息ついて目を開けた。

もう、店主の中には、”高田”という人間は存在しなかった。

第18話

『正義を計る物差し』

終わり

第19話『破滅への葬送曲』

『…逃げ……翡翠…』

『母…さん…?』

目の前が真っ赤だった。まるで、赤いペンキで部屋中を塗り潰したような光景がそこにあった。その真っ赤な部屋の真ん中で、血まみれになった母が横たわりこちらを見つめていた。

『母さん!!どうしたの!? 一体…何が!?!』

私は、横たわる母にすぐさま駆けつけ、一体何があったのかと尋ねた。しかし、何度尋ねても、母は、仕切りに力なき声で『逃げろ』と、しか言わなかった。『一体、何から?』私は、解らずにひたすら母を呼び続けた。

やがて、その声も途切れる寸前まできた時に、私を必死で探していた姉の声が聞こえた。

『翡翠っ!!!』

『姉さんっ、母さん…ッ、母さんが!!!!』

私は、姉に訴えるようにそう叫んだ。だが、姉はこのことを予期していたかのように、横たわる母の姿に目を向け、一瞬泣きそうな

顔をして、私にこう言った。

『…いい？翡翠、よく聞きなさい。母さんと父さんは、もう…ッ、…助からない。』

『何を…？父さん…ん？父さんも！？』

『今すぐ家を出るわ。そして、安全な所へ逃げてそこで身を隠しましょう。』

『何を言ってるの…？嫌だよ、姉さん！！母さん達を置いてはいけないよ！！…』

姉の言葉が、とうてい理解出来なかった私はそれを拒んだ。しかし、姉は有無を言わず私をそこから連れ出した。

『嫌だー！！母さん！！父さん！！姉さんっ、放して！！…』

『…翡翠、ごめんね。あなたまで失う訳にはいかないの！！…』

そう大きく叫び、私の手を引きながら走る姉の背中が、泣いていた。

この話は、10歳になったばかりの私が、まだ、本当の名前で呼ばれていた頃の話。

「……角っ、…深角!!」

「…ッ…!!」

「どうしたんだい？酷くうなされてたよ？悪い夢でも見たかい？」

そう言うと、牡丹は心底心配そうに深角に尋ねた。そんな牡丹を見て、『ああ、夢か』と、もう何百回ともなる台詞を心に吐いた。そして、何事もなかったかのように振る舞い、こう言った。

「…悪い、お前に逢いに来ているのに居眠りをしてしまったな。」

「何言ってるんだい。あたしは、そんな事気になんてしてないさ。深角が此処に来てくれるだけで幸せなんだよ。だから、疲れている時は、構わず寝ておくれ。仕事、仕事で、まともに寝ちゃいないんだろ？」

そんな彼女の言葉に、深角は、フツ…と、下を向き小さく微笑んだ。そんな珍しい光景に、牡丹は驚き、どうしたのか？と尋ねた。

「いや、似ていると思ったんだ。」

「…似てる？誰にだい？」

「姉さ…、俺の」

「深角、姉さんがいるのかい？」

初耳だよ、と、心底驚いた彼女の表情には、自らの事をあまり話さない、深角の貴重な話を、また一つ知れたという嬉しさがうかがえた。

だが、そんな彼女とは正反対な表情を浮かべた深角は、天を仰ぐようにしてこう呟いた。

「いるんじゃない…、いたんだ。」

そして、こう続けた。

「己が愛する者に殺されたんだよ」

朝から嫌な予感はしていた。空は晴れているのに、それが、自分には泣いているように見えた。あの日の姉の背中と重なって見えた。だから、急いだんだ。姉が住む隠れ家へと。何か忌み知れぬ恐怖が自分を支配する感覚だった。

『姉さんっ!!』

荒々しくドアを開けた。ドアに鍵が掛かっていないというのは、本能的に分かっていたのかもしれない。頭によぎるのは、あの日の光景…波打つ胸を何とか平静に保ちながら部屋へと足を踏み入れた。

そこにあっただのは、あの日の母と同じように、部屋の真ん中で横たわる姉の姿だった。

ただ、あの日と違うのは、苦しんで逝った母とは対照的な、どこか安楽に満ち溢れた表情で眠る姉と、その様子をただただ見つめる我が友、そして姉の最愛の者がいた。

『どづい…うこと…だ』

私は、その言葉を発するので精一杯だった。だが、その質問に答える者はなく、私の、その精一杯の声は、静かに消えていった。動揺して、未だに動けずにいる私を後目に、友であり最愛の者である彼は、静かに部屋を後にした。

「あ、あの…深角、その、ごめんなさい…」

鬼の形相で、一点を見つめたまま動かなくなった深角に、牡丹は、自分が余計な事をしたのだと、いたたまれなくなり涙を流して謝った。

そんな牡丹に、我に返った深角は、牡丹のせいではないと宥めた。それでもなお、泣きながら謝り続ける牡丹を抱き寄せこう囁いた。

「俺は、大切なモノを二度も外の世界の奴に奪われたんだ。一つは、両親、もう一つは姉さん。…何の権限があつて俺から奪うのだろうな…、そんなに俺が気に入らないなら俺を殺せばいいのに…」

「…みす「まあ、その前に俺が奪うけどな。…俺から家族を奪った外の世界の人間の大切なモノを…今度は俺が奪う番だ。」

「深角、お前さん何を…、」

「見ていろよ、牡丹。お前には一番良い席で見せてやる。」

そう牡丹に向かって微笑んだ深角の表情は、先ほどのような優しい笑みではなく、阿修羅の如く恐ろしく、尚且つ美しい笑みだった。そんな深角に、牡丹は、味わった事がない恐怖で胸がいっぱいだった。一体、彼はどうしてしまったのだろうか？今、自分の瞳に映っている彼は何者なのだろうか？まるで別人の深角に牡丹は戸惑いを隠せなかった。

それと同時に、阿修羅と成りつつある彼の、まだ、微かに残る人の心が、悲鳴をあげ、泣き喚き、救いの手を求めているように、牡丹には思えてならなかった。

落ちるとこまで共に落ちよう、と、牡丹は、彼の背中に手を回して、一層強く抱き締めた。

そんな彼女の想いを感じ取ったのか、深角も合図するかのように、ただただ強く抱き締めた。

そして、二人は破滅へと歩きはじめる。

『破滅への葬送曲』
終わり

第19話『破滅への葬送曲』（後書き）

読んで下さった皆様、こんばんは（・・）

深夜の更新で申し訳ございません（笑）

しばらく停滞していたこの小説、何とか2話更新する事が出来ました。

これに安堵して、また更新が滞るかもしれません（笑）

なるべく頑張つて更新しようと努力しておりますが、この話を読んで下さっている皆様には迷惑をかけるかもしれませんが、何卒温かい目でよろしくお願い致します（・・）

それでは、また次のお話で

第20話『咎人の幸せ』

『恋の想い出は、いつでも美しいもの』と、遠い昔に誰かが言っていた気がする。

柊は、ふとその言葉を思い出し、寝室の小窓にひっそりと飾つてある、2つの写真立てを見つめた。

そこに写されている人物は、それぞれに違うけど、彼女にとっては、生涯忘れたくても忘れられない人物である事には違いなかった。一つ目の写真の人物は、お世辞でも格好いいとは言えないが、とても優しく温かい人だった。名は『優』^{ゆう}と言い、優しくすぐれた人間になるようにと、母親がつけてくれたのだと、よく言っていた。その願い通りに、彼は成長した。

そんな彼と出逢つたのは、まだ仲介屋になりたてだった頃、当時、仲介屋の頂点に立っていた、『No.5』の菊に呼ばれて彼女の家に遊びに行った時の事だった。菊は、柊の祖母であり仕事のお手本、言わば師みたいなものだった。

『お久しぶりです。おばあ様、体の調子はどうですか？』

『ああ、まあまあだね。まだまだ現役と思いたいけど、体はそうはいかないね。』

あちらこちらが痛くて仕方ない、と、両手で体をさすりながら笑った。菊は、この時すでに70歳という高齢で、老体に鞭という状態だった。

『何を言っているの、まだまだ、おばあ様には習わなくてはいけない事が沢山あるんだから、元気でいてちょうだいね。』

『そうだね…お前の花嫁衣装を見るまでは、まだまだ元気でいなくちゃね』

誰かいい人はいないのかい？と、尋ねてくる祖母に、いたら仕事なんてしてないわよ、と、柊は笑いながら返した。そりゃそうだと、菊も、また笑った。

そんな話をしながら20分が経過しただろうか、玄関が開く音がし、小さいではあるが、凜と透き通った声で、ごめんくださいと聴こえた。

『おや、きたね。柊、ちょっと待ってておくれ』

そう言うと、菊はその声のする玄関へと消えていった。柊は、自分が知らぬ声だから、客か何かだろうと思うに止まった。

それから、5分が経っただろうか、すぐに帰るからという客人を仕切りに引き止める祖母との攻防戦で、ついに客人が折れる形になり、祖母と共に部屋に戻ってきた。

『柊、こちらは私の友人の弟子で、名前は優。優、こっちは私の孫で弟子の柊。歳はお前より3つ下だよ』

『はじめまして、柊さん。私は、将淨先生の所で弟子をしている優と申します。』

深々と頭手をついて頭を下げて挨拶する優に、柊が抱いた第一印象は、地味な男、はつきり言っつて自分のタイプとは全く真逆な男、だった。

『はじめまして、優さん…孫の柊です。お互い同じ道を目指す者として頑張りましょう。』

『はい！！いつか、『No.』になれるように頑張りましょうね！！』

ずれ落ちるメガネを手の甲で押し上げながら、屈託のない笑顔で笑う優に、地味だがいい人そうだと心に思い、そうですねと笑った。思えば、この時からすでに運命は周り始めていたのだろう。二人はこの事がきっかけで、何度か食事に出掛けたり、師には言えぬ仕事の悩みなどを話し合う仲になっていった。そうしている内に愛が芽生え、静かに育んでいたのに、その悲劇は突然にやってくる。

『話がある』

彼から電話でそう告げられた柊は、彼の声を聞いてただ事ではないと察知し、急いで彼の待つ家へと向かった。

くしくも、その日は、祖母の菊が病に伏せ、天に召された為、そ

の後釜として、柊が『N O . 5』に就任した帰り道だった。

『どうしたの？何かあったの！？』

開口一番に柊は彼にそう尋ねた。だが、彼はずっと俯き強く握りすぎて白くなった拳を見つめていた。

チツチツチ…と、時計の針だけが進み、嫌な空気だけが空間を支配した。

暫くして、彼は何かを決意したかのように、顔を上げ柊に向かって、小さいではあるが、あの凜と透き通った、迷いのない声で、こう呟いた。

『 - 私を殺してくれ - 』

柊は、目の前が真っ白に染まった。

『な、何を…突然、一体、なに、』

言葉にならなかった。目の前にいる恋人が、何故死ななければならぬのだろうか？到底理解しえなかった。

そんな柊をみて彼は淡々と今自分に起こりつつある事を説明し始めた。

『今日、病院に行ってきたんだ…そしたら、医者に若年性アルツハイマーだと言われたよ。最初は耳を疑って何度も何度も聞き直したが…どうやら本当らしい。ごめんね、柊。俺は、あと何ヶ月か経てば君を忘れてしまうんだ。本当に…ごめんね。』

無理矢理に作った彼の笑顔からは、涙が溢れ出ていた。アルツハイマー？私を忘れる？いつもなら瞬時に理解出来る事が、思考回路がプツリと切れたように動かなかった。

そして、彼はこう続けた。

『私は身よりがないから、このままでは君に迷惑をかける。君は、まだ若く美しい。気立てもいいし少しワガママだけど、本当は誰よりも情に脆い。そんな君を、私なんかよりも幸せにしてくれる人は、大勢いる。』

『嫌よ、あたしはあなたがいいの！！あなた以外の人からの幸せなんて…柊、私は君の幸せの邪魔だけはしたくないんだ。君を心から愛してるから。…でも、君を忘れることは、死ぬ事よりも辛い。だから、君を忘れるまえに殺してくれ。』

『…優…ッ、』

あの後、何度も何度も頭を下げる彼の家から、逃げるように出て

きた柊が、無意識に辿り着いた場所は、今日、同じく、『No.』に就任したばかりの青年が営む殺し屋喫茶だった。

もはや気力の殆どを失った体が、支えを求めるかのように、openの札が掛けられているドアに触れた。

カラン、鐘の音が鳴りその音を聞き、店の奥から先ほど別れた同期で、美しい中にも残酷さが見え隠れする、この店の主が現れた。

『いらっしゃ…おや、仲介屋さん…先程振りですね。どうかされましたか？』

そう微笑む主の瞳の中には、今さっき自分に起こった出来事が、全て映し出されているかのような気がした。

『あ、の…あたし、どうしたらいいか…分からなくて…』

もう、誰かにすぎるしかなかった。自分一人ではどうにも出来ないぐらいに、心が張り裂けそうだった。そんな柊に、店主は座って訳を話してみても、と尋ねた。言われるがままに柊は、椅子に座りポツリ、ポツリと優との事を話しはじめた。

彼との出逢いから、楽しかった日々、そして、今さっき起こった出来事全てを話した。

『…あたし、彼を失いたくない…彼以外の人と幸せになんてなれないわ！…けど、』

そう呟いたまま、柊は口を閉ざした。溢れてくる涙をこれでもかというぐらいに拭い、ボロボロに崩れた化粧もそのままに泣き続けた。そして、暫くして落ち着いたのか、また話しはじめた。

『…けど、この先、何もかも忘れた彼…と、共に生きていけるか…自信がな…』

柊は不安だった。彼女にとっても、彼に自分を忘れられるのは、死よりも恐ろしかった。

あなたならどうする？本当に小さく、彼女から発せられたその問いかけに、店主は暫く考えてこう答えた。

『愛する者の為に自分を捨てるか、自分の為に愛する者を捨てるか、どちらを捨てるにしても後悔は一生残りますね。…ならば、僕は、より大きく後悔する方を取りましょう。その後悔を一生己の咎として生きていきましょう。ですから、答えは後者です。』

店主のその答えに、柊は救われた気がした。

『殺して、ほしい人、がいるの…』

店主に、優を殺してくれるように頼み、店を後にした。そして、そのまま彼の家へと戻り、ありのままの自分の想いを包み隠さずに伝えた。

それを黙って時折頷きながら聞いてくれた。そして、話終えた彼女に向かってこう言った。

『君の気持ちは十二分に分かった。氣に病む事はない。それよりも………どうか、許してくれ、自ら命を絶てない卑怯で情けない私を。そして、どうか、忘れてくれ、こんな愚かな男のことなど。………幸せになれ、柊。』

彼は泣いていた。彼女も泣いていた。泣き続けてやがて涙も枯れ果てた。氣がつけば朝になっていた。

恋の想い出は、いつでも美しいものなんて、そんな事有り得ないと否が応でも氣付かされた朝だった。

あれから、もう7年か、早いもんだと柊は目を伏せた。あの時の選択が正しかったなんて思っていない。一人の愛する者の命を奪ったのだ。それは許されることではないし、己の一生の咎として、それを生きて償おう。

ただ、あの時は、ああする他、道はなかった。

柊は、彼が最期に、自分に言った、彼の願いでもある『幸せになれ』という言葉を、未だに叶えられずにいる自分が情けなくて、申

し訳ない気持ちで一杯だった。

第20話

『咎人の幸せ』

終わり

第20話『咎人の幸せ』（後書き）

皆様、ここまで読んでいただきありがとうございます（・・）
昨日、更新が滞る的な事をほざいていたのに、早くも更新する馬鹿な作者です（笑）

とくに、あとがきはないのですが、お礼だけ言わせて下さい。

いつも、本当にありがとうございます（・・）

この話？と読んで思われる方もいらっしゃるでしょうが、どうぞ温かい目で見てやって下さいませ（・・）

それでは、また次の話で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9866f/>

No. 4

2010年10月15日09時27分発行